

坪内にて

梅田と云

久坂様

返々折角々々寒さ御いとゐ御つとめ被成候やうにねんし上り、梅田家義くれくもく御願上り、

一〇一 本城清書翰栴取素彦宛 文久二年十一月廿五日

小簡拜呈仕候寒威凜烈御座候處愈 御安泰被成御座奉拵賀候過日は惠然御來過萬々難有胸中之積蘊任口吐露如此至快は曾て無之事と井生共申合ひ相喜ひ申候福川逆旅之奇興如何々々可喜又可笑也即夜富海の御乗船之處西風烈敷候に付三田尻の御揚陸之由迄は承り及び遺憾千萬と被存候併陸路に亦も纒之里程之事故早速に御到着定而御苦心御盡力被爲在候義と奉想像候何卒御東上之節は徳山の御上舟之御積りに御一決被爲在度偏に

奉待上候御唯諾申上置候南豊密翰并浪花書狀共只様遅緩相成恐入奉存候別に寫取之儘差出申候御收手可被下候先は心事而已申上度草々如此御座候恐惶謹言

十一月廿五日

本城清

小田村文助様

侍史

二白 時下御厭專一御義奉存候井生々厚く御致聲申上吳候様申出候萬々不盡

附 岡藩某書翰「安戸磯等宛」 文久二年十月七日

南豊密翰

未得拜顔候得共一筆啓上仕候寒冷之候御坐候得共先以彌御堅榮被爲入珍

栴取家文書第一 (文久二年十一月)

百六十七

重御儀に奉存候然は春以來は小河彌右衛門一列京伏之間に罷出居候て各様方不一方御懇篤被下重々難有仕合奉存候此度歸に付ては 叡慮之旨御書下けも頂戴仕候得は一廉賞譽にても可有之所奸臣共術策に陥り言語同斷之次第畢竟弊藩儀近世國元無人士風怠惰にて志士擯廢せられ佞臣登庸國議不正多く乍去大祖創業以來勤 王無他腸家筋に候へは長薩御兩藩之御舉動隨ひ寡君儀も非常之豁眼を開き祖先之遺志被致繼述當路之例之開悟致候得は公武之忠義先祖之孝道不過之國家之榮枯此時に候へは同志戮力盡力専ら周旋致候得共上下貴賤因循偷安之舊染脱却不致忠士を讒誣拒絶し邪說流言採用に及成下候去月上旬御著即日は小河始一列之者親類たり共對面文通一切差留慎被申付十三日に左の通答筋被申付候

公族家老

中川 土佐

隱居にて於野宅慎被申付圍出來召込士并足輕番付爲父子共對面文通差留

小河彌右衛門

親類預之形にて官宅に圍出來召込父子たり共面會文通差留番付
友之助事

廣 瀬 健 吉

暇出之上親類預之形にて揚屋入

但此壹人罪重きには無之候得共輕輩に付如此右三人同罪之取扱

陽一之父

城 代

田邊儀左衛門

彌右衛門實弟

側物頭

中川 傳次郎

弓術師範取揚苗字遠慮可致旨也

學校掛り

野溝甚四郎

右三人隱居慎近親之外對面文通差留右三人共家督は夫々嫡子に被申付

祿は先規之通格式は並のふり極て引下け

右之外十人餘り格下り或は斥役擲度被申付候

一右何れも不埒筋糺明も無之主人存寄有之旨にてと被申渡候主意は表に顯れ不申候

一右之外當春京伏之間に罷出候者其の分には以來右體心得違無之様にと嚴重被申付尙同志と疑敷列には夫々聞調有之向後同志之者は接し不申様との内沙汰也

右は其意味色々有之候得共兎も角も夫は暫指置第一 叡慮之御主意一向貫き不申重々恐入候事に御坐候尤右御書付は彌右衛門歸著早速家老共に出し寡君も拜見被仕候事に御坐候得共其義は頓と棚上げにて右之通に相成申候奸臣共術策可惡事御察可被下候夫に付私共悲歎仕候は主人此節江戸召申候極て何歎御役向にても蒙體にも可有之今の儘にては姦臣共の毒天下に及ひ可申も難計苦心之事に御坐候何卒右之旨御含被成下宜敷御

掛合被成下候様奉仰願候主人來る十四日發駕之賦りに有之右供にて當時君寵專一出頭要路にて番頭熊田陽介用人小原隼太勝手懸り役大坂詰衣笠文藏此三士之心主人通伏之砌出京可仕候此者共は姦才相働き候者にて此節陷穽の策にと出頭之者に御坐候定而御對面申候も可有御坐尙御逢も被成下左之旨被仰述被下度尤先日發途に瓦林重藏夏目惇平外貳人都合四人罷登追て出京可仕是は表裏反覆之徒に御坐候何様熊田小原兩人之者へ得と御示談奉願候其主意は夏以來久々小河列上方に罷出勤 王之忠志御同様之事に付何歎其覆^{不明}被仰談度被下事に先頃御歸國之處にて是迄類例も御聞及無之程の 叡慮御書下けも有之御主人迄も 叡感之御文言も被爲在御義極て御歸國之上は一段之御賞にても可有之と御歡思召被下候所近來御承知被成候得は重き御咎に相成候由右は如何之事に可有之候右御咎之御主意は御主人様思召被爲在候御事之由左候得は外御主意にも可有之哉に候へ共其御咎之砌御一同御出京相成居候方々にも以來右體御

心得違無之様にと申御達もありたる由左候得は外御主意とも不被伺外に御主意有之候通比類無之御書下け御頂戴之上は御家中一統にも御示相成御出京有之候御方には是非御賞筋被為在候て社 叡慮に被為叶 叡慮を被重候御主意と被存候夫共小河氏列御國法に其儘被差置れ難き御事に候は、一應御賞にて 叡慮を被為立候上引改御各被為在は御都合次第之事に御坐候所御賞も無之直に強き御咎にては何共御氣毒に思召候事に候尤他藩之義御頓著も被下間敷事之様に候得共尊王攘夷之為國忠者は水戸前中納言様御贈官位存命之者は是迄御咎置之者も御赦免死亡之者は御仕置之者も以禮收祭と申厚き 勅諭を被降右を長門守様江戸の御持參に付右筋に拘り申事は彼是御周旋御盡力有之中の事に御坐候既往之事すら右之通と申今度勤 王之忠士被盡候方に強而御咎御坐候ては尊藩を御傍觀成兼候關白殿下青蓮院宮様且議奏方にも内々御伺之譯も被為在候て及御懇念候右は譬御發駕前國法に被背候譯有之候共是は其節柄御政府始當

路之方々非常之御處置御活斷と被存候如何にも致て 叡慮之旨を重しられ已往之罪悉く御赦宥にて御賞筋被行候様有御坐度此段大膳太夫様御掛合と申振合に相成申度候尤小河氏列 上は被為對御不圖合之譯有之たる共致せ右之通にては第一修理太夫様御義 叡慮に被為悖候譯にて自然御所向御内沙汰有之譯に成行候は前文之通赦宥筋之義は御家に御引受之譯有之候に付不及御懇念候早々御赦宥之上御賞を被行 叡慮に被為從候様有之度旨に被仰下度候尤此上之處にても一旦罪を被赦御賞し有之引直し又御咎と申様の事にては只々形容計の事に付左様之事には無之様隱居の衆も再勤御役被免候御方も御再役にて一旦是迄之事は捨りにて無御坐ては不相叶事に被思召候左候は、此後有時は夫は修理大夫様思召次第之事と被仰下度ケ様迄詰て不被仰下候ては何分はか行申間敷候尤右罪を赦しかく、之次第取扱と申事早々大膳太夫様迄申上候様左候得は御内々殿下始御所向にも御達可被成候と被仰下度候

一右之通被仰候共一應は何と歎品を付陳し申候て可有之候得共如何様共
臨機應變に御取ひしき被仰談可被下候尤陽介隼太兩人は段々時勢情態
を御問合申譯等も可有之其處にても一向御取合不被下畢竟御家にては上
下一統尊攘之御忠士を被養度何も 叡慮御尊奉之思召に付岡藩にても是
迄小河氏同志之譯にて御藩中御同様之義と存萬事被仰談候得共右御列重
き御答 叡慮被爲悖候様之事にては萬事被仰談兼候と手強く御突放し可
被下候瓦林重藏列此後罷出候共右同様の筋に被仰向暫御取合不被下候様
奉願候左候は、姦臣等行當り必面をかへ申にて可有之其處にて小河列慎
解候得は又如何様にも十分之周旋振可有之間何分右之處吳々御盡力奉願
候

一此狀早速相届今度主人關東之召に付今度通行之砌前以御承知にて伏見
大阪の御使者にても被遣被下前件之旨被及御掛合被下候方可然哉共相考
候陽介隼太義も主人同日出足にて主人通伏之跡にて直様出京之賦りに可

有之候兎に角右兩人に委細被仰下候方可然と奉存候尙品に寄候ては江戸
表屋敷之者にも御使者にても被遣主人手前之御掛合被下候様奉願候兎も
角も都て急場致兼候國風に付重々御せり立被下候様吳々奉伏願候
一彌右衛門列歸國後殊更右咎有之候て後は都て他藩之洩し可申かと旅人
の出入書通之義探索強く奸徒之狐疑以之外嶮敷折柄に御坐候萬々一も此
表之御密通申上候義相顯れ候得は以の外之事に御坐候右咎振等之事は熊
本列之御承知被下候形に御話合可被下候夫とても又熊本へ如何之手筋に
て委細之義相知候哉との疑起り如何様之所置可有之も難計此段は可然御
談し可被下候迎も心底は言語筆頭に盡し不申萬々御恕察御推量可被成下
候只々岡藩を今一度起し申義偏に尊藩に奉依頼候間何分々々宜敷奉願候
右申上候如く嶮敷時節に付寸穴を得御通し申上候義に付態と姓名顯し不
申候ケ様申上候ては御疑も可被爲在候得共決るゝ浮たる事には無御坐
候尤彌右衛門歸國早速早速官途に申達し所々御挨拶可申上候書狀置候其

内右咎相成不殘火中仕候其内之一通殘置候爲證據差添置申候聊も御懸念なく前件之次第宜敷御懸合被下勤 王之忠志を盡し申様相成度吳々奉頼願候尙薩藩にも申遣候次第も御座候間品に寄り御話合可被下候右は餘り切組仕御指圖かましく可被思召と恥入候得共心付候深情不殘置申上候段は吳々も御恕察被成下此上の御策略如何様共被回御賢慮微忠之苦心御恕察御救助之程奉願候

一寡君に於ては左程義徒之者を被惡候には無之五月初通伏之砌彌右衛門之直に形勢申上候迄は至極聞受宜敷候に付出伏之者共其儘彌右衛門に任せ置候と迄被申置候其後奸臣共讒佞にて有志之列は一體主家を後に致し勤 王を唱己は榮利を謀る如く申込終に讒説信用被致一應歸國致寡君へ直に事情形勢委敷申述候様咎筋等無之と重々被申諭無據一應歸國之所著早速君側の者を以て尋有之候銘々赤心申述候所是以以奸舌取成申達上下通情無之心外之事に御坐候

一小河一同出京罷在候渡邊彦右衛門義は様子有之大坂京伏に罷出候様被申付候に付同人罷登候は、委敷御通申上御示談も可被成下と合居候所同人義瘡病再發に煩罷在候快氣次第出立之賦りに御坐候得共何様手間取可申候に付無據密通申上候事に御坐候彦右衛門出京之上は何も無御覆臆御談被下候様奉願候

一向後同志中御文通申上候義も有之候歟又出京出府にても御對面相願候義も可有之同志證符之爲別紙印鑑差上置申候間此印鑑無之節は同志に無御坐候左様思召可被下候尤江戸表へも印紙御廻し置可被下候様奉願候右は遅筆不文愚慮之儘相認卒然之至御許容御推讀可被下候

一御藩を嚴敷御説破被成下候所にて當路之列困窮に堪兼土佐并彌右衛門慎解之義は俗にていふ負惜みにて免し兼尙再度出京等御坐候亦は難澁に存前議之如く主人存寄と歟何と歟主意を付屠腹可申付も難計之勢に有之候右に付土佐并彌右衛門共天朝を御用之義も御坐候に付他出等不爲致候

義且疎略之義無之様と申義を正親町様當分議奏御加勢之由此御殿は主人家續合に御坐候御方に付此御殿を以右之段主人迄御内勅下り申候様相願度左様相成候得は事の運行は手取候迎先安堵仕候事に御坐候

右は拙志之有情不殘奉染筆候不敬之罪は幾重にも御仁免可被成下候吳々も一度起國志士の微志貫透仕候様御盡力之程奉希候

一當六月十五日岩倉卿之彌右衛門迄御内々被仰下候御旨趣御坐候に付早速同行之内野溝甚四郎罷下り委細申述候則別紙の通之旨趣に御座候右御受之義其砌出府之者御坐候に付其者出京にて岩倉様御殿に罷出一應之御受申上右は不容易義に付寡君義も得と相考重て以使者可申上と申置候其後使者も不差出候岩倉様御催促も被仰下候其後大坂留守居上京にて右御受使者相勤候様及通達則出京之所岩倉様御解職其跡を被爲繼候之彌右衛門に參殿被仰付候正三位様も御慎に付其儘退坂仕其段此表に申越候所先其儘にて何たる御受も不申上等閑に打過申候正三位様御使者之義は如

何哉と毎々彌右衛門迄御尋御座候乍憚御萬察可被成下候右の被仰下候旨趣は別紙之通りに御坐候かゝる國辱迄洗ひ出し候段愧恥之至に御坐候得共切齒の餘り難默止申上候前にも申上候如く姦徒の狐疑は嫉妬可恐時態に付萬々御憐察密事洩し不申様此書早速御投火可被成下候何方之何々の手筋にて委敷御承知相成候段分明に被仰下小子輩に疑ひ掛り不申様吳々奉伏願候先は右迄省筆仕候恐惶謹言

豊後州岡

十月七日認

世臣

宍戸九郎兵衛様

前田孫右衛門様

中村九郎兵衛様

佐々木男也様

久坂玄瑞様

尙々時下切角御自愛被成候様奉存候吳々も本文之通何も宜敷奉願候彌
右衛門列の追々御入魂被成下候御方には御内々本文之旨爲御知被下候
様周布君桂君にも被仰遣被下候様奉願候返すくも密通禁秘此書御投
火可被成下候以上

一三白 本文申上候之策成就にて禁錮幽閉解申勢に及候は、其期にて
家老土佐并彌右衛門義御用御坐候に付

京都に罷出候様尊藩の御内勅何方の歟降り申様之事業に相成候後は
速に國議奮起可仕とも奉存候是等は餘り未然之義差越たる申上方重々
奉恐入候得共不惡御推得奉願候何分々々餘りに自負之申上方御聞受も
如何と恐縮之至に御座候得共心事申上密々以上追て此書上包之手跡故
有て他筆に御座候

一彌右衛門歸國之前薩州の申達候口上書一冊入貴覽申候右之通申達候
て歸國仕候義に御座候御含可被成下候上薩邸の之別封乍御世話御届奉

願候

以上

此書十月廿六日達

一〇二 江村彦之進書翰宛名欠 文久二年十一月頃カ

一宗藩人常に輕蔑致し候と申事

一宗藩を何ぞ困窮致し候へは手を下げ頼候と思ひ候事

一廣家公以來何を申ても宗藩には眞に用ひ候心は無之と思ひ候事

一宗藩に於岩人を取扱候に御三末士人眼前に於面目無之扱振り多く口惜
と申事

一右之廉々胸中盤結致し候故宗藩より何を申掛候も軽く食ひ付き後悔

致間敷と思ひ居候事

一右之通故宗藩人と接候には必正々堂々と禮節を失不申様にと致し居掛

り可申故親密家人之禮之如く不成候義專一と存候
一岩人自から富強に天下之變を待と申事定説之様相見候事
一岩人 朝廷にも御手を不被爲出方却る宜敷戊午覆轍御戒可被成と申説も有之様相見候事

一先つ書生五六人も出し形勢を實見致せ候事第一策と被考候事

一大坂の廣島一六船又は三八船又は五十船の御乗組被成廣島御著之夜岩國番船に七代壺人前新港御著五十丁貳里岩國の御出之方可然候

廣島便船は壺人前金壹歩壹朱に候尤飯代込なり

自然壹艘雇切りに致し候へは新港迄金四兩三步位之由に候

一新港の先達の人を岩國の御遣し町役處の御案内御旅宿御頼被成候義御都合と存候

新港の人は人足雇立に候

一岩國の徳山迄十一里一日程に御出脇本陣中村屋の御止宿可被成候

一徳山の小郡の十二里一日程

但徳山又は福川富海の長府迄舟も御座候

一小郡の長府迄十里位一日程

一徳山御出之上京都形勢詳に御咄被下度存候且益田大夫前田君敵邑一事に付御周旋御配意之段眞密愚兄兩人并井上阿兵衛にも御咄被成候而宜敷但小生周旋仕り 貴兄様御配意之段は本城清之外には御咄被下間敷様奉頼候萬事陰微之中に挽回肝要と存候義御座候

一小生書狀愚兄の遣し候分徳山御止宿に御座候へは御著之上直様宿屋主人を以御遣可被下自然遠石の舟に富海か長府迄も御越に候へは遠石町役所の御頼置被下候様奉頼候

一〇三 中村九郎書翰「久阪義助宛」 文久二年十二月四日

一明五日彌 勅答被仰出 兩卿御入城無相違候哉都る右御答之次第如何

相成候哉布告も昨今には相運候哉之處今以爲何御様子不相聞是にても
兩卿御引取之御次第相立候筋に御坐候哉委細被仰窺御答被仰越可被下
候事

一 明日御請相濟候上は右御歡御餞別弟毛利登人なり其被差越候都合に可
仕右之節兩使之御贈金三百兩宛猶諸大夫其外之御餞別金纔なから
被差贈候間同人持參被仰付候様仕度如何可有之哉是亦被仰合御内答御
聞せ可被下候事

一 御發程彌七日に相決候哉是亦同斷

一 浦大夫は一日御跡出足に付其段 兩卿被仰上置可被下候事

一 昨日 儲公之 大樹之被仰聞箇書等之寫は明朝迄に差出可申候御赦
宥は過日京都にも御窺相成候分丈此度は御沙汰相成櫻田其外は追々取
調らへに相成筈に候列藩にも御沙汰相成事に候は、勿論此餘は 勅諭
遅く相運にて可有之いづれ僉議は手數事に付無理に迫詰られ不申候此

段 兩卿被仰上世古格に別段御内噂被成置可被下候事

一 尾老之御沙汰少々不審有之に付越に取締および置候事

一 肥の南木密話之趣僕不安心に御坐候今日粗論置候得共僕も印判を突候
迄は得受合不申右に付而は篤と御談合申上度義も有之候間何そ其内御
示談仕候事有之候共其御合に成置被下候様必々奉頼候桂子にも得と談
合仕度相考病中彼是未得其義候事

一 姉小路様御用人姓名御聞せ之事

右之廉々乍御妨御答被仰聞可被下私義も今日は少し快復明日よりは蹶起
仕度奉存候委細御面盡可仕候以上

四日

中 村

久 坂 様

密啓

一〇四 佐久間啓書翰「小倉健作宛」 文久二年十二月六日

寒候愈御清健御勤修御坐候御事と想像仕候借此方より夏末之呈書遅達候
内七月念三日之貴簡拜接御履況をも詳悉東西の模様をも御熟知の事共被
仰下奉謝候其砌千秋氏内訪に付歸府の節先口上を以て拜報申候義に御坐
候ひき定て御承知可被下と奉存候其後閏月十三日之華翰小林生より相届
け拜見仕候いつも御佳勝と承り慰渴想候相願候王氏洪範傳も早速御寫さ
せ御送り被下千萬辱奉佩荷候家父も宜しく御禮申上候様申付候將御稿本
御示及乍例不堪擊節就中鎖國と航海執便の一篇は當今有用之大文字殊に
敬服の義家父も甚御稱申候一通寫させ有志の門人共へ相示し候義に御坐
候此度一評を附し返壁仕候御接收可被下候さて 君候様御忠誠を以て東
西に御周旋被爲有候趣に相伺難有御事奉存候何卒御鼎力を以て御國是相
定り異議無御坐候様仕度ものに御坐候貴邸にても惜しむべき人材物故の

よし久坂氏も一跌せられ候との事遺憾不少候此節京師の御模様も殊にけ
はしく候との御事に御坐候家父なども此際に當て少しく籌策の無之には
無御坐候へとも屏居の身唯長息のみ致し居候近日も一詩を賦し壁に題し
申候録註博御一粲候身非眞隱愧王公王應仲却用壯圖付世雄霜雪貿然年紀逝
老夫砥合臥廬東色々御話申度事も御坐候へとも憚り候筋にも候故不能一
々候乍延引秋中御投簡の拜報且洪範傳御送り被下候御禮迄得貴意候義に
御坐候小銀一片附上仕候寫手へ御附し可被下候寒威折角御保護御坐候様
奉祈候以上

十二月六日

恪 拜

小 松 君

机下

附白 勝へ御紹介の事早速申遣し置候所是も多忙にて漸近日いつにて

も御入來被下候様御申通し致し候様申遣し候尤も晝の間常に不在勝に候間晩來より御出被下候様にと申事に御坐候左様御承知可被下候乍序得貴意候家父致手録門人に内々取らせ候櫻賦の卷致轉傳正親町三條大納言公の御手より

天覽に入れられ候所 御感を以て家父手書のまゝ、禁中に御留に相成候趣正親町家御身内より門人の方まで慥に申遣し候にて致承知家父も冥加に叶ひ候事と自慶仕小生に於ても難有事に奉存候家父自慶の作有之内々懸御目候必ず御他見は被成下されましく候唯千秋子へは密に御示し可被下候櫻賦愚註も入 天覽候趣に付家父の微志も果して蒙 天知候義と奉存候以上

○榊取素彦自註

松代藩佐久間象山自簡譴責中を以て伴某の名を署す

一〇五 益田右衛門介書翰「榊取素彦宛」 文久二年十二月十三日

除姦一條過日大徳寺の參館懇々 淡州侯に及説得候處漸く御納得に而實に日を期し置候處一昨十一日已に延期之限に而福間左近弊宿に參り粟屋采雄光井充右衛門兩人儀は役儀令差替他出留遠慮松原嘉樹東東馬儀兩人とも役儀被差替隱居他出留遠慮之段拙者の申達相濟早々在所に申遣し其沙汰相成候由に候其外姦物之人柄有之候故段々 淡州侯にも申上候得とも彼是御説も有之縮る處四人之外は無之様被 思召杯之御嘶に而姦物に被御欺被爲成正物と御論定とも被爲成居候御様子に付此餘は拙者の御相談事は更に御無用と申上置候間別段之外姦人ども之儀は宗藩之斷案に不致而は不相捌に付早々其取調致し候儀に候間眞の内密申越置候條其合を以て江村生其外先は穩に罷在候様御示教之程希望致す處に候尙様子も有之候は、又々可申越候

十三日

翠山

小田村先生

一〇六 本城清井上阿兵衛書翰〔榊取素彦宛〕 文久二年十二月十四日

十二月初九之尊簡同夜五更相達難有奉拜讀候如諭寒威甚敷御座候處愈御安泰被成御座海路御安穩可被成御着京奉拵賀候奉別後長府御越候處御意外に御同志も有之餘程之奮興左京亮様御不快中故爲御代宗五郎様御上京之筈に御唯諾相成即時粟屋族義右之儀爲御伺上京仕候由御苦心御盡力之程萬々奉想像候過日は三吉内匠義奮發伏見上京仕候由承り及候京師之都合族罷出候も別可宜と奉存候來春は御三末岩國共目出度御揃御會議等も可被爲在兼々之思召通り相成可申は眞に爲國家奉萬賀候然し長府も老姦路に横り正議を致梗塞孰一應分裂之上ならては一統には歸し兼可申候由白杵も御密會申上候に付即日閉門になり候由可嘆に御坐候併白杵等嚴譴等は一番奮激之基とも相成却る姦物自斃候罪案を作り候訣と

奉存候決可憂には可無御座候也陳當地も例之俗論相支へ富山事今以上京得不仕仍而は奮發は益甚敷御座候得共兼申上候手筈に參り不申遺憾々々々々然益國相には彌徹底之御世話被下候由に付何れ不遠始末付き可申と夫れ而已奉仰願候何分乍此上御周旋被下候様偏に奉願上候爾後之形勢は愚弟迄申遣置申候間御聞き可被下候陳御歸京之節是非共御再逢萬々相伺可申と實に相樂み居候處清義世子陪從福川驛罷出候趣御承知に付左様に候へは御急ぎ之義に付直様富海御出帆可被成尙申上度義も有之候は、書中に可申出候段旁被仰置早速謹承仕候誠に遺憾之義奉存候何分不日御歸國之節は是非御都合被成下御逢被仰付可被下奉願上候先は右御請迄申上度心事而已草々申上候恐惶謹言

十二月十四日夜認

清

阿兵衛

小田村様

侍史

二陳 時下御厭專一義奉存候年少輩毎々御屋敷罷出國相君御獎激被成
下余程相喜候由に候粗暴之事計申狀仕り可申御叱可被下候不乙

又云阿兵衛が一幅拜呈仕に付御厚謝被仰下却る奉愧入候期望之意御
座候事と心事委曲に御領知被下候段何共恐入奉候得共知己之言難有
奉感佩候呵々

一〇七 楫取素彦書翰「山田宇右衛門宛」 文久二年十二月廿四日

夜前者罷出御馳走に相成奉拜謝候老臺御東行論徹宵勘考仕見候處幾重も
可然儀と不被存候因之別に一説愚案を廻候件も有之今晝過迄には拜話可
仕候間必々小生御面話相濟候迄は霜臺が老臺御東行之伺不被差上候様仕
度奉存候右申上置候以上

極月廿四日

二白 御同僚が霜臺へ申入候件霜臺氣付も有之候は、極密承置度奉存
候以上

小田村文助

山田宇右衛門様

侍史内用

一〇八 山田宇右衛門書翰「楫取素彦宛」 文久二年十二月廿四日

昨宵有難奉存候小生東行之儀昨日來未だ同局に出會不仕候付其後之論如
何御座候哉承り不申候取紛貴答のみ草々頓首

乃

山田宇右衛門

小田村文助様

一〇九 楫取素彦書翰「山田宇右衛門宛」 文久二年十二月廿五日

御東行之期も相迫り御繁忙想像仕候右に付小生も一策を建居候得共昨日御聞取被下候哉御采入に不相成候遺憾は無之候得共只所憂國家多用之御中麻田壹人のため餘り御手數を取候事故幾重も老臺夫而已に御東下は御到當之議とも不被考候尤外深重之御議も有之哉にも相伺是等之件局外之員參知可仕様も無之候得共概して論候處に又々老臺麻田說到籠罩を被受候は國事をいつれへ御措被成候歟彌籠罩を御脱樊之御見詰も御座候は御發軔も可然候得共其儀も格別御目途も無之候は、先御東行被差止度奉存候御氣關し中乍不入事平日之誼と相考盡言及此候御審慮奉待候以上
極月念五

文 助

宇右衛門様

奉呈

一一〇 山田宇右衛門書翰「楫取素彦宛」 文久二年十二月廿五日

表諭奉拜承候御尤之御儀苦心之至に御座候へ共筆不盡意近日參拜委細可申上候取紛貴答のみ草々敬白

乃

宇右衛門

文 助 様

一一一 前田孫右衛門書翰「楫取素彦宛」 文久二年十二月カ

昨日來之御建白一條委曲拜承彼是御案之段御尤に奉存候此義に付は過日來種々致苦心竟に一昨日拙家におゐて終日相議候處何分入組候趣有之候村別人東行仕候は却る紛亂を生し可申左候は麻田而已ならずあた

ら勇士を五人も三人も野埜之土に可相成至極大事之義に付同局宇右衛門
罷越候義至當と決議相成申候尙又昨夜霜臺御亭に於宇右衛門九郎相會種
々及議論候處宇右衛門罷越候か至當にて可有之と宇右衛門自身にも申候
昨夜之論談委曲上山安長承知に付可被聞召候尙宇右衛門九郎も可申上
候何も筆端にては難申辯候它是萬付拜晤候頓首

耕堂先醒

陸 山花押

奉復

一一二 久阪義助覺書

文久二年

御宥免もの不洩様とは乍申萬一洩候は、追加も御願被下度候事
今度之勅意之旨普く天下へ御觸に相成其向々は右に準し罪狀之もの有之
候は、國法常格にさゝはり申候て其國々にて各方等申付有之候者歟一切

是を守し其譯早々申出候様可被下候と觸示有之様有理度候事

當春來之處にも各に相成候分大略西國にて左の如し

薩州大島三右衛門列之事

森山新藏御切腹之事

暴發一件へ組候もの一切國元へもとし有之事

田中河内介と秋月海賀宮門合五人薩州へ遣し有之是も被免歸國有之候事

但此内海上にて横死ものもの三四人有之もし自然横死いたし候は、以

禮收葬之部に相成度候事

日州延岡にて彭康と申僧之事幽囚せられたし

久るめ一件之事

秋月にて海賀之一族幽閉有之事

福岡にて平野二郎幽閉之事

土州にて吉村宮地之事

佐土原にて富田孟二郎池上隼之助之事

暴發にて國元へ歸し有之分如元悉出京致候様有之度事

熊本にも子細付之向可有之歟も候得共是は天下一致之觸位にて可宜歟
天下へ可被觸示文面大略之事

今度以出格之 叡慮別紙之通被仰出候間此旨奉敬承國々に於ても右
に準し候私に國事に關係致し答筋申付置候者も候は、一切に是を許
し其旨早々可申達候事

右は從

公儀……………

一一三 武市半平太書翰久坂義助宛 文久三年正月二十日

青陽之御慶無盡期申納候先以愈御勇猛可被成御越歳目出度御儀と奉存候
隨亦小生無事加年仕候乍慮外御安神可被成下候扱去秋以來度々同志之者

罷出何卒御高話承り可申千萬難有奉存候此度又此もの御近邊へ罷越候間
勿論私共同志者に御座候間諸事無御用捨御高議爲御聞被下度奉希候鳥渡
右得御意申度如此御坐候尙期重便之時候恐惶謹言

正月廿日

武市半平 太花押

久坂玄瑞様

尊下

一一四 檜崎彌八郎書翰久坂義助宛 文久三年二月十五日

益御安康奉恭賀候昨日は能き御供被仰付難有奉存候大に酩酊前後不覺失
敬御免々々陳對州之一件毛利へ相談候處孰れ難御見捨事に亦御周旋無之
亦は不相濟事に御座候昨夜略御噂有之尊君大坂へ御越九郎へ被仰合候事
は至極可然乍併上亦被仰亦被差越候譯には未だ評決不相成候間唯々兄之

御見込之處を以被仰合候は、則其處跡を表向被仰越候に御都合宣布と奉
存候何卒御縁合相成候は、御越被成御内運ひ被成置候は如何哉實は内
々毛利も氣を付候間申上候御出被成候は、早が宜敷萬一九郎出足仕候
は残念に御座候明日は肥藩同伴御出被成候は可然必々御待申上候併尊君
には大坂へ御出被成候は、寺島佐々木氏其外御越に相成候様御傳聲奉希
上候十七日中山侍從御出之處は少し御見合可被成候又々模様も可有之候
榮太郎出足は仕候も宣布新 御殿には別に御用無之其段乍御面倒村田
へ御申傳奉願候先は爲其可申上候餘は拜青縷々可申上候草々頓首

二月十五日

尙々御國も御手當一條は餘程てこはく候事にも實は兵銃杯之御仕向と
申候も御六つヶ布かと奉存候左候は、米銀之邊を以御助相成候方に
も如何哉何分も尊兄之御見込も有之萬々都合克九郎へ被仰合候様奉
祈候又頓首

彌 八 郎

玄 瑞 様

極内急き

一一五 大原重徳上申書

文久三年二月十五日

長門守の被 仰渡候大赦之 勅諭之内伏見之一條相除候一件御取調敬承
候右は相伺候儀勿論申迄も無之候處愚存見込を以取計候段何とも恐入存
候得共長門守大赦 勅諭を持下向着府直に幕府の可差出候處及遅怠候
は何歟子細も可有歟と幕府を不審候は何とも同人も甚心配難澁仕候由
に候も實以俄之儀故相伺候間合も無之候に付不相伺見込之通りを以相除
き候事に候是は不相伺して相除候事之譯にも候右相除候見込之譯は伏水
一件は薩摩之事にて幕府の被 仰付候御事とは乍恐不奉存候然る處幕府
の被 仰遣候て幕府若是は薩摩一手にて出来之儀則主人之命ともに候間

薩摩に可被 仰下御筋にて幕府に被 仰下候御筋にては不被爲有と申上候節は何とも御不都合に可被爲在と一圖に奉存候然るに前條を通り相伺候間合は無之如何可仕哉種々深慮を回し候得共何等之手段も無之長門守は差急候儀重徳は御不都合に不被爲在様にと存詰候に付一心決定候見込之邊を以書改候事に候重 勅諭を書改候段は深々恐入候得共前條之次第長門守難澁に不相成様重徳御不都合に不被爲在様にと一圖に存込候より右様恐入候事なから取計候事に候御調に付有體言上仕候尤見込之邊心得違に候は、更に幕府に被 仰遣候て重徳御答之事は從元覺悟仕居候事にて則書中にて野宮殿へ申入置候扱此中に申上候も恐入候得共右取計候に付ては前殿下御配意之筋も御消散に相成御都合之様に野宮殿を御書中に示給道中にて拜見候猶又上京之上更中山殿三條殿野宮殿へも申述候て御聞込に候此段も申上候右申上候書改候儀は實以不容易儀何とも恐入候得とも元來遲鈍之性質殊に當惑候右之次第に相成實以深恐懼仕候何卒格

別御憐愍之程宜御沙汰希入存候也

二月十五日

重 徳

大 藏 卿 殿

四 條 侍 從 殿

一一六 榊崎彌八郎書翰〔久阪義助宛〕 文久三年二月二十日

愈御安康被爲在奉恭賀候昨日は御待申上候毎々結構御馳走被仰付萬々難有奉存候然は昨日は鷹司殿へ 世子君御出被遊此内之御書面御差出被遊候處御社參御行詣之處少し御六つヶ敷様に御尊有之候様子決る古格舊例を以之御論と被相伺候 公も少し御押込之處御半途之様被思召候段今朝被仰聞右之段内々老兄に申上明朝なりとも鷹司殿御出被成拜謁候而御口氣御伺被成前斷之次第に御座候は、得と御論し込被成候而は如何哉萬々

乍御苦勞御出之方偏に奉希上候左候御模様も御座候は、御聞せ可被下候一通りならば御書中に可然御知せ可被遣候様奉願候先は爲其可申上候餘は拜面縷々可申上候草々頓首

二月廿日

彌 八 郎

玄 瑞 様

二陳 前段可然御周旋奉希上候乍憚諸君へ可然御致意可被遣候以上

一一七 久阪義助書翰〔妻宛〕 文久三年二月廿五日

尙々けさより寺島出立に付いそがしきゆへ梅兄へも書状さし出不申候そもしよりよろしく御傳言頼入（り）

いかにも此せつは多用に付文をもおくり不申候得共拙者事別條なく日夜外出などいたし候間御安んもし下さるべく頼入（り）此うちの御文にて

そもしの無事をもきゝあんもしいたし（り）此せつは將軍御上京などにて京師もにきはしく昔よりまれなるほどの事に有之申候きんりさまの御こゝろのごとく相ならずては不相叶若殿様を始御苦心なされ候事に候此處にて日本の盛になるもおとろへるも分り候事に候得は中々大事なる事と朝な夕なに苦心此事にて候去年の此せつまでは松洞も中谷もおられ候事にてたのしみ候ところ今はなき人となられいかにも残念之至に候九一も此内上京先々力を得候こゝちいたし（り）何もあらゝ寺島よりおんきゝなさるへく頼入（り）めてたく（り）

二月廿五日

あらし山には此せつ櫻の花さかりにてけしからぬ花見にて候
大きみ比御幸しもりああらし山やま櫻花今さり望あ察

玄 瑞

お文とのへ

無事

一一八 梅田とみ書翰「久阪義助宛」 文久三年二月晦日

一筆申上り、おひく、あたゝかに相成候處まつ、御機嫌よく入らせられ候御事御めて度御うれしく存上り、つぎに自もふしに世をわたり、乍憚様御安心可被下候然る處御上落も近々に相成まつ、結講に存候勝、又伺候得は昨冬は御前様御事江戸へ御下りのよし相伺候處最早此比は御歸京被成居候御事と存候余り、御無沙汰さまに相成候ゆへ一寸御左右伺、私事も坪内河合にて世話に相成申居候間是又御安心被下候扱御女才も有間敷候得共梅田家儀何分々宜敷く御ほねおり被下候様にと一入奉願上候色々申上度御事も御座候得共御らんの通筆まわりかね候儘御めもし様のせつゆる、御物語り致申候先は右御願申上度御左右

伺迄申残し、早々めて度

二月晦日

梅田とみ

久坂玄瑞様

人々申給へ

返々折角々々時かふ御いとる御くらし被成候やうにねんし上り、れ、梅田よろしく御願申上候私儀も宜敷奉願上候、春のあめ何國もおあし、何の物うたひの空、

とみ女

一一九 木戸孝允書翰「久阪義助・佐々木男也宛」 文久三年三月七日

拜啓

兩兄御壯榮奉大賀候、借先夜粗御嘶仕候越前公質論は麻田の篤と熟談仕見

候心得御座候間佐々木君途中迄御出に相成候は、まつ此論は御見合兼お
之御持論のみ御示し被成候方可然哉と奉存候一とつ事を誰れも彼れも侃
々と申候も却る徹底薄き事も有之申候成否は兎も角も古人も總る事を旋
し候に人之窮する所の活路を開き候而成就致し候氣味多く申迄も無之頓
に御承知之事には御座候得とも質論御見合可申上ため奉呈候勿々頓首拜
初七

尙々時山へも可然御致聲是願候事

允拜

久兩兄

御内披

一一〇 眞木保臣書翰〔久阪義助宛〕 文久三年三月七日

寸楮謹啓仕候時下春暄益御萬福奉大賀候鄙生依舊劣々罷在候乍憚御降心

可被下候然は鄙生事罪科被差辨其翌々日上京被命候間直に罷登可申用意
仕候處俄に薩州に使者被差立鄙生義差添罷越可申被命候當八日發途七十
餘里往來大凡二十餘日も相掛可申罷歸候上直に上京可仕心得に御座候已
來は何歟御寵顧に預申度鳥渡此由申上置候恐惶謹言

三月七日

眞木和泉守

久坂元瑞様

二白 去年十二月十日發之華書辱拜見仕候頻に御苦辛之趣昏表に相溢
申候時際左も可有之事には御座候得共御賢勞之程深々奉察候扱當今之
急務三ヶ條可有之三條公へ卒略なから申上置候別段尊兄にも申上度奉
存候得共發途前勿々出來兼不本意なから相略申候一體帝王之業と覇者
之事は名分も違候事故此節は可成丈光明正大にして假初にも人を憎候
様之事無之様奉存候鄙生も不遠上京可仕拜晤之上萬可奉承荒々得貴意

置申候實は子弟之内一人爲登申度奉存候得共即今紛々何事も行届不申御海容可被下候猶又御同盟外様にも宜敷御致聲奉願候

一二一 寺島忠三郎書翰名宛欠 文久三年三月二十日

大亂筆御免

別時草々何も不能盡今更殘懷千萬御推量可被下候坂へ御著御乗船之都合に相成居候迄之事は男也并長嶺の手附をも承知仕候得共其後之御様子丸々不相分然し昨日前は日和も宜敷且又昨日は殊之外東風強く定る大分御運の事と而已思父と時々想像仕居候此元の模様も大概は同様之事に御坐候併し一昨日早朝閣老防州殿下の罷出言上之事は大樹急に攝海順覽形勢見分之事とて俄に願取其なりに在歸府をも可退所存に被察候間是非今日中大樹の參内せよとの朝命に候處此段御請に相成直様其儀轉法輪家より肥土我との三藩に御相談有之夫より色々三條家姉小路家へ言上之筋も有

之家茂參 内之砌一橋萬端言上仕候間彼御兩卿より申立之廉々委細に一橋へ御申下け之處甚當感仕候様子に在罷在候由猶又期限之義も御手強く御せり込有之一紗におゐても甚苦心仕候乍併攝海見覽之義は水戸にも耕雲齋餘四丸を以直に大樹の申入候由之事朝廷にも兼々御聞取も有之且我藩之申立も有之期限確定拒絕手都合言上之上は御許容有之との由御申聞せ有之により即ち將軍より言上之筋は拒絕之義は一橋を下東させ歸著已後八日之御宥免を願ひ無相違斷判可仕との事なれ共流石朝廷にも毎々の欺謗に合點か行たか御請も甚六ヶ敷候處大樹よりも種々手を盡し御願致し候間萬端不決に在大樹も退出仕候次第甚以被按候處昨日午後閣老防州參 内幕議内決之處言上仕候由其日姉小路殿より世子君の申入置候との事故い細に承知仕候其次第は昨日言上之筋朝廷御聞入振之處一同苦心仕候間重る談判仕候に付内決之處不取敢言上との事それは一橋下向之處先延引致させ拒絕斷判之義は丸に水戸中納言の御委任に付在は耕雲

齋は兼る望も有る者故中納言輔佐之爲且此都合萬端申含早々發足させ馳付急速拒絶驗明白にさせ候次第に只今彼仁呼出を掛置候間出勤致次第申付候得は是も兼々望之義故迎も御請不仕様之事も有之間敷由未だ其義耕雲齋は承知も不仕候得共此次第内決候處取上との事就るは昨日現在大樹言上之事相違致候段は恐入候得共期限早まり候處を以御詫申との事且四月中旬期限御請重一橋を以廿三日期限言上之處兩度之義は丸に相違仕候段は將軍直筆に御斷申上との事丈け昨日申上候夫に付朝廷に右將軍言上之次第其書面寫を以諸藩へ御布告被爲在候との御内決之由少將殿より之御咄に候乍併今日一橋參内之始末は今以相分不申候此議は全く尾州奮發致候より相決候由其次第は追々御承知も可有之候間更に不申上候猶又今日世子君俄に二條之屋敷へ呼に參り候間御行向有之此儀何事か不相分候是は必竟一橋等一決之處を申入積と被考候一統之掛念は昨日松本謙三郎一橋僕之處へ參り申には攘夷之義は長門家と不相談也

は不都合故是非世子君に御下東相願候由を板倉防州噂有之忽彼等懸念之段申參候故其義は迎も無之事と申聞せ候得共最早今日は世上一同之風評と相成天下之義士とも大分に氣遣居候由必竟は將軍參内之節是非轉法輪姉小路兩卿御見届之爲御下東相願候間夫より種々掛念之輩も有之候得共其等之事は迎も朝廷にも御許容も無之事は御當人御兩處よりも御咄有之候何分其餘萬端盡申難夫而已申上候隨分御一統御氣體御自愛專一之御事に候勿卒曉店別荘に認候間亂醉中幾重にも書筆十分一之意も通兼候間萬々直八より御聞取可被下候以上

廿日

二陳 僕辭京之事も今に引留られ御社中に對しても甚以不相濟候得共是も已に已れぬ事もあり其儀は御推量可被下候乍併千里隔ても萬里隔ても心は一後をとり因循に打過酒食に沈溺致候義は毛頭御懸念被下間敷候猶又萬縷直八より御聞取可被下候勿々

一二二 久阪義助書翰「妻宛」 文久三年四月廿五日

此内已來度々のおんふみたしかにうけとり、一々御返じもいた
さずさぞ、御あんもじとすいし、

ちよと申遣し、さてはこの度拙者共同志中三十六人下のせき出張と
しておもむき申候昨夜とのみにつき候この度は萩もかへる事には不相
成いかにも情なきものとおもひ玉はるべく候得共おん國の御大事には引
替られ不申候まことに多人數にてこゝろつよき事おもしろくいさましき
事に候なにものちの便と申殘置候めでたく、

四月廿五日

杉みなさまへも宜敷おんことわりなされ玉はるべく候中井玉木其外へ
もをなじく頼入候已上

去ら雲れたあびくくやはあしがきれふ里ぬゆさとのゑとのあさり

ふるさとの花さへ見すふ豊浦のふひさきも里と吾は來よ
眞木の立あら山中れるまりつもとがま手あぎ里夷きごめあ
あら磯よせ來る浪の岩よふれちとふ砕くる日がおもひり取
夕なぎふいさくななきそこま千鳥あが聲きけば都しおもほゆ
おん笑とすいもしいたし、

お文とのへ

一二三 土屋矢之助書翰「久阪義助宛」 文久三年四月廿七日

啓上今朝飛脚到來老兄山口迄御越之狀承及引續馬關に出張之由御多忙奉
察候小生も侍從卿に陪し一昨夜萩著いたし日夜御左右に侍し大に心配之
處に肥後宮部鼎藏弟態々來り其旨趣は米藩紛擾に眞木輩幽囚に逢候様
子因る肥後藩同志申合長藩津和野などの哀訴いたし是非米人之苦憂を解
度との懇願今日政府に其段届出置候多分小生一寸津和野まで明日當りに

參一議論可申哉未相分不申候侍從卿は老兄馬關に發行之義申進候處明日
を馬關出立致度と被仰候故又々其議に決し候何卒御拜謁之上は諸事被仰
上可被遣候小生は津和野用事相濟次第一寸罷出候はんと存候得共多病之
身體とても侍從卿の健剛には敵しかたく候間往々は御斷可申上積御座候
卿之御正議は奉恐入候得共惜哉御若年故御定心乏敷御付之面々も折々込
入候次第も有之候間兼御懇切被成候事能々御諫諍有之度奉存候心事申
上度候得共多忙中不能縷々拜青萬々可申上候時下向暑萬々自玉可被下候
頓首

四月廿七日

蕭海 生拜

尚諸同遊の宜様御傳達可被下候

久坂老臺

侍史

一二四 村田次郎三郎書翰「楳取素彦宛」 文久三年五月三日

貴墨拜見仕候扱は小五郎を差越候手紙御持せ被成下候處御届之義は如貴
諭いづれも差出候後何とも致方無之次第御坐候右は小五郎存寄も御座候
得共於爰元私共決着之上引取候義に付後日之罪は引受申候御本末御一和
之處は死否も奉禱候趣に付何も拜 鳳に縷々御相談申上度先は貴答まで
如此御坐候草々頓首

五月三日

村田次郎三郎

小田村文助様

貴答

一二五 淵上郁太郎書翰「久阪義助宛」 文久三年五月十三日

楳取家文書第一（文久三年五月）

別袂已來太打絶る御無音罷過失敬之至に奉存候扱弊藩不計大難に而同志
之面々一人も不殘被召捕幽囚之身と相成誠以殘念千萬に御座候此度同志
之者共遽に嚴科被處候哉之由相聞へ候間御藩桂君以下御同志様不一方御
周旋被仰付御藩の勅諭相下り同志之命相助け候様と之義に付山縣君杉
山君弊藩の御苦勞被下誠に以難有仕合に奉存候儀事も關白殿下の遽に
歸國被命重役渡邊内膳と申者同道大早に罷下り申候其趣意は矢張同志
之者救い之爲に御座候乍併奸人はひこり候時勢に御座候得は拙身如何相
成可申哉是に至るは必死同志を相救ひ奸人をたをし候歎自分之身斃れ候
歎之外無御座候ほのかに承り候得は異船御打拂之事御座候由誠に以愉快
不堪奉存候首尾能參り候は、上京懸得拜顔可申馬關の御出之事大里永野
九助の承り候付なつかしさの餘り鳥渡捧愚札候早々頓首

五月十三日

淵上郁太郎拜

久坂玄瑞様

一二六 横田清兵衛書翰「楳取素彦宛」 文久三年六月十二日

今朝申上候後大津表へ講武所三千人計押懸到著表は御迎と唱へ候て更所
謂不分明なる事右御手當方肥後藩人數御差向に相成候何とも怪敷候に付
此段申上候草々以上

六月十二日急用

横田清兵衛

耕堂先生

御座下

一二七 木戸孝允書翰「楳取素彦宛」 文久三年六月十三日

大概是先刻申上候通に而其他之儀は委細御承知被爲在候次第に御座候御

楳取家文書第一 (文久三年六月)

二百十九

歸國之上は乍慮外弟頓に歸省不仕は不相濟候處逐々御嘶仕候通手も著
け置候事半途に相成居不得止今日まで延引仕候尤此度之事一決之上は是
非一往は早々罷歸り申候に付此段麻翁にもよろしく御致聲上之處可然奉
願上候且又此羽織破れものにも失敬に御座候得共不苦候は御用可被遣
候道中別に御自愛申上も疎に候早々頓首

十三

木 圭

小 田 邨 様

御内披

一二八 久阪義助書翰「妻宛」 文久三年六月十三日

あつさのせつさぞ、おんこまりとすいもしいたし、拙者も先月廿
八日急御用有之にわかには京都へのぼり候てゆき候十日滞留五日十五日目

にかへり候ほどのいそがしき事にて候又々京都に一方ならぬ御大事あり
候ゆへ上京せずにはならぬ事にてます田彈正どのまちうけ一先ちよと下
の關へ出直様上方へのぼり候様御沙汰にて候いかにも外國よりはせめき
たり日本うちにもにくききたなきやつどもたくさんにおいて内外ともに
淺からぬしんばい事にて候

天子さまのおぼしめし 殿様御父子さまのおんころざしどこまでもつ
らぬかではならぬ事と數ならぬ拙者までも苦心いたし、御すいもし
給はるべく候このたびはちよとなりともかへり保福寺のおんはかまへり
をもいたしたくそんし、得ともいかにも右之通之事ゆへしんていに
もまかせず候生雲へもわたしの無事にてかれこれほねをおり候だんおん
きかせ下さるべく頼、文かくいとまも無之候吉田小太郎どのおとよ
どのおい、大くなられ候事とすいもしいたし、杉みなさまへよろ
しくおんつたへ下さるべく候上方の事いかにも氣にかゝり、しかし

下の關も大事高杉出張のよし安心いたし、いつれ下の關にてゆるゆる申合のつもりにて候いそがしき事ゆへ先はあらく申遣候めてたくかしく

六月仲の三日

玄 瑞

尙々あつさおんいとい申までもなき事にてかんもしにそんし、
上

お文とのへ

一二九 淵上郁太郎書翰〔久阪義助宛〕 文久三年七月十二日

過剋は失敬仕候御大勞之義御頼申上早速に御聞届被下誠に以難有之次第奉厚謝候泉州は彼事談判仕候處實は泉州も御尊之都合に大に心痛之模様
に御坐候昨日御藩は罷出委細御談可申積り之由に御座候處 彈正様御出

京之日に付少々遠慮仕候模様
に御座候今日は定る御相談可申義と奉存候
野生分 貴兄は御尊申上候都合に
は大に宜敷無之候間泉州を申上候う
ゑにて御議論被下候様奉頼候弊藩之
一條は如何之都合と申事承り候爲私
罷出可申上筈に付條公を御歸館御座候は、
乍失敬御歸り都合柳馬場二條
上る處迄鳥渡爲御知被下候義は御叶申間敷哉御相談申上候右之段得貴意
度候早々頓首

七月十二日

淵 上拜

久坂様

一三〇 長藩有志願書〔楫取素彦筆〕 文久三年七月

附 楫取素彦覺書

小倉五罪

多恐も 叙慮既に、攘夷に被爲決長門下の關におゐては數度戦争に及

ひし處小倉は咽喉緊要之地をトなから未嘗一門之砲も不構一介之兵をも
不出常に是を傍觀するは武備不足乎夷狄の内通乎罪一也
癸丑來十餘年間賊を眼前に見なから不育人材不繕武器尸位不覺之罪二也
六月五日佛夷田ノ浦に上陸せしに是を不擊而已ならず剩彼れか書狀貳通
を受取候事夷狄に狙れ 御國辱を不辨罪三也
嚮きに長州より毎度使者を以て 叡慮之所被爲向夷狄速に不攘はあるへ
からざる趣意懇切に申諭せしかとも幕府之普代と云ふを以て更に不應遂
に長州より砲臺場處推借せらるゝに至る是全く義理に暗く隣國之禮を失
するの所致罪四也
幕府奸猾之所爲違 勅之振舞を知ら一其不正を不糾は普代之責を
不盡 國家之大變を不憂して因循姑息に安す罪五也
右五罪は 皇天之所照鑑決不可免之逆賊也假令 神勅之威嚴に因一旦
陽從仕候とも素より其君昏愚にして其臣情弱忽ち夷狄之有となる時は

皇國之御一大事と奉存候伏願くは其君臣を貶逐し忠肝義烈必死之士近邊
に不之候間一先是を以て此地を守らせ長州と相應援仕候時は賊艦幾千萬
襲來るとも決る内海には擱入爲致間敷奉存候左候も佐賀之關鳴戸之口屹
度其任を撰て防禦被 仰付候は、中西國は平穩勿論之義と奉存候乍恐
御明察被遊速に 御英斷被爲在度不願微賤奉申上候恐懼死罪
文久三癸亥七月

長門國

有志 士謹白

附 榊取素彦覺書

七月廿四日富海出帆廿六日迄備前近参り東風強く備中笠岡を揚陸晝夜兼
行同月卅日午過京著直様正親町殿に参候徳田隼人より之托し候少將殿御
親簡相届翌八月朔日政府相對中村九郎差圖に因り烏丸殿参候米藩池尻茂

左衛門早川與市郎薩藩山田三郎一同也翌二日德田隼人一同正親町殿參候
池尻茂左衛門山田亦介同道夜に入於正親町殿に三人一同東久世殿萬里小
路殿烏丸殿三卿御對顏五罪の書取物御聞合有之尙三使一件に付水府加治
清右衛門姫路川合惣兵衛野宮殿へ參候申立候由に三使の小倉は行候儀
は勅書の表既往は御尤不被成故小倉も改心攘夷に落着候は、責罪御免
有り度し左も無之ては既往は御尤不被成候御 朝命反古に御成し成され
勅書の表反古に成りては 朝權の御弛にも可相成哉云々此に當り各共答
振は如何哉との三卿御問有之文助云凡事には大小輕重も有之此を御權り
被遊大なる者を先にして小なる事は後にいたし重きを取て輕きを御捨被
成度既往の御一言に泥つみ小倉の大罪を御免あると既往の御一言はたと
い御構いなくとも凜然と 神勅の威嚴を以て小倉の罪過を御糺明とは
朝權の隆替孰に大關係有之候や是を以て三使并二藩留守居の奏聞を御詰
り有之時は乍恐既往の御一言は區々たる事に成可申且小倉攘夷に決心の

儀三使の返答計りに無之實行を御試にて眞實より決心乎否乎の處御驗
有之度夷賊の襲來は何時も難測愈決心攘夷と申事なれば早速砲臺を築人
數を操り出し器械を運置き其手筈を合せ置く可し然るに右三使へ返答申
聞せ候後日數も立候得共其儀絶て無之扱又尊 王攘夷は同一體に御座候
處愈攘夷に決心仕候は、尊 王の驗も立た、すては不相濟然るを 勅使
貳度も彼地へ御渡海なれと御先案内一人も不差出夜に入り御歸館に成り
候得共一點の燈一束の炬火も御馳走不仕本より馬關御滯留も四五日に候
得共其間家老重役は勿論一小吏と亦も御旅館へ參候 天氣を伺候儀も絶
（以下欠文）

一三一 久阪義助書翰〔榊取素彦宛〕 文久三年八月五日

德田氏へ可然御鳳聲奉祈候

貴札奉拜見候 朝議御内決之由に付別段會議には及間敷候今夜は因州藩

士談合之趣も有之約束仕置候義に付甚残念之事に候得共罷出候事不相叶候爲御斷草々貴酬

初五日

よしすけ

小田村先生

貴報

一三二 久阪義助書翰「榊取素彦宛」 文久三年八月十日

益田山田外出に付乍失敬貴札奉拜見候此内飛脚被差立候事に付先便も急には無之尤兩三日内には有之可申と奉存候大急御用に候得は同志中申合急に歸國仕らせ居候も不苦候様奉愚案候今夕は用事有之外出に付參上得不仕乍失敬徳田氏可然御傳聲奉祈候爲其草々貴酬

八月十日

久坂

小田村様

貴酬

一三三 中村圓太書翰「榊取素彦宛」 文久三年八月十三日

敬呈

御勅使少將様御沙汰之趣一々堂上家の言上仕候處世子下野守事上京之儀爲御守衛早々發駕仕候様既に被仰出に相成候故今更又候右上京御差留之儀被仰出候は朝威軽く相成候姿に御坐候故其段は不被爲出來候但立花山城儀は世子へ先急上京仕候様可被仰出候由に御坐候矢野梅菴御登用之件は少將様迄勅命可有御坐候由被仰聞誠に冥加難有次第に御坐候乍恐右之趣尊兄に被仰上被下候様伏奉願候猶又委細御承知之分は程能仰上置可被成下候は、重疊宜奉希候頓首

八月十三日

野口保

小田村先生 函丈

一三四 中山忠光書翰〔久阪義助・寺嶋忠三郎宛〕 文久三年八月十七日

彌御安全珍重存候抑過日は入來之事御頼申入候處所勞之由にて中村來候處其砌申入候覺悟之處少々次第有之延引に相成候彌 御親征御沙汰有之候に付同志一同大和の下り勤 王之兵寄東夷打之心得に有之候將又甚面働之義申入候得共此一封學習院御差出一封は三條家の差出之取計御頼申入候段々此迄御藩にて御世話に相成御主人の御禮宜御頼申入候也

八月十七日

忠光

久坂義助殿

寺島忠三郎殿

追ふ御藩一同の宜御申入頼度存候事

一三五 中山忠光奏聞書 文久三年八月

臣忠光謹而奉奏聞候 臣曩に不肖之身を以叨に 朝恩を辱し奉り晨夕左右に昵近仕殊遇を蒙候段今更奉拜謝候も恐入候次第と奉存候然に前年來海内騷擾奸賊共逆威を振恐多も 朝家を輕蔑仕候様子見受候も臣不肖不堪憤懣一旦跡を草野に匿し必死を以國家萬一の御報恩可仕心得に御坐候處天時未至逆賊免誅各々歸國仕候段遺憾無申計候今日に至り候ては大樹を始一橋慶喜松平春嶽等何れも違 勅之逆徒速に征討之師を御興し被遊候て可然義に候得共何分 朝廷には兵馬之御大權不被爲在候故 叡慮之程御貫徹被遊兼候御事と奉存 臣實に不堪悲泣此上は邸内に罷在偷安之中に日を送り候より再草莽に潜匿仕速に天下之義士を招集し目に當り候奸徒

を傍より誅戮仕其人民をして幕政之患苦を脱し 天朝之恩澤に歸向仕候様仕數千之義民を募候て 御親征御迎に參上仕候半其節逆徒征伐仕候様被 仰付候は、臣必死を以深賊地に入不日に渠魁之首を斬 闕下に獻候半と 皇祖天神に誓奉り決心仕候義に御坐候仰願くは 聖恩臣之微忠を御憐被遊臣之義舉を御助被遊候は、草々正議之諸藩士共御召に相成逆徒より申上候儀斷然御取用無之速に錦旗を御建被遊在京逆徒草々放逐被仰付候様味死奉懇願候 臣忠光誠恐誠惶頓首再拜

（楳取素彦自註） 此爲中山忠光氏發於大和之際所奏上文案係松本謙三郎起

草外封有忠光上之文而忠光氏沒西海謙三郎死大和并不得觀今日之盛

痛豈可道耶

庚寅秋九月

源 素 彦識

一三六 中山忠光書翰三條・豐岡・東久世・烏丸宛 文久三年八月十七日

時勢切迫に付不能而罄一紙申上殘候幕府違 勅以來數十日に及候得共兎角罪科御糺之御沙汰も無之内悖逆之書付等差上其外奉輕蔑 朝家候次第非一右に付拙者不堪憤怒思立候義有之既に發程可致候處 御親征御沙汰被仰出御同様大慶仕候然に兵は神速を貴候義即日 鳳輦を御進相成候様ならては決る相成不申御因循有之候内必然奸徒より妨仕候歟又は攘夷致候など之説を以欺候は相違無之候依之御延引等相成候は、切角之機會を失し可申候右等議論致候も無用に候間實効を以入御覽候諸君にも必死御盡力四五日内 行幸相成候様可被成候 拙者も義徒を募南都迄御迎に參上可仕候此義誓 神明相違無之候間速に御決被成候可カ若期限を過候は、神州陸沈之罪諸君に歸可申一寸も御油斷無之様致度候草々頓首

八月十七日

忠 光

三條中納言殿

楳取家文書第一（文久三年八月）

大藏卿殿

東久世少將殿

烏丸侍從殿

編者曰 本文は松本謙三郎代筆署名及宛名は中山忠光の自書也

一三七 入江彌源太書翰「楳取素彦宛」 文久三年八月廿五日

爾來倍御機嫌能可被遊御座奉恐悅候此短刀一福田四郎兵衛より 尊君様
の差上吳候様兼被相頼居候處過日御下向之節他出中故不遂其事今日以
幸便差送上候間御落掌被致可被遊候扱京師之一條實に不堪奮激之至御胸
痛之程奉遠察候逐付徹底之御正義御開運可有御座奉祈事に御座候徳府之
義も此節にては美政布行 君等之御恩庇と難有御事に奉存候先は急便亂
毫御推讀可被下候宜敷被仰上可被下奉頼上候已上

八月廿五日

入江彌源太

小田村耕堂大先生

侍史

二白

京師之吉左右共無御座哉有之候は、乍御妨此者へ一寸御一筆奉希候

一三八 久阪義助書翰「妻宛」 文久三年八月廿九日

尙々われ事もやまれぬ次第ありてよしすけと名をあらため、
しく

その、ちはいか、やと朝夕たへすあんもしいたし、われ事もさわり
なくくらし候ま、こ、ろやすくおもひ下さるべくそんし、さてはこ
のうちおんくにかへりおり 御前にて御内めいをうけ上京これやかれ
やとちからをつくし候ところ去十八日のこといかにも口おしきはわるも

のども數千人

きんりさまをとりまきそのうへ御國にてもちまもり候へし御門をも外の
人におんあづけになりこのせつにてはけしからぬにくき口惜しきしわざ
のみいたしいかにもくさんねんにて候それゆへこのうち清末さま岩國
さまおんかへりのおりもひようごまではおんともいたしり得どもそ
れよりもすだどのをはしめ申合またくふたゝびのぼりおんやしきのう
ちにかくれおりを相まち申候このせつにてはきびしくせんぎなどいたし
まわり候ゆへゆだんはならぬおんやしき外へはひとあしも出不申候まこ
とにざんねんとも口おしとも申すにあまりあることにて候さよう候得ば
せつかくの

きんりさまのおほしめしも

とのさまのおこゝろさしもちよとはつらぬき申まじくまことにむかし
のくすのきさまにつたさまなどのおんこゝろざしにてなくてはならぬす

こしもたゆみてはならぬごじせつとわれ事もよるひるくろういたし參ら
せ候さてはこのうち小田村兄さまおたちのおりしもかの二男の方を養子
にもらひおき候まゝみなさまへおんはかりなされておもらひなさるべく
頼入り小太郎どのおちよどのもせいじんとよろこびり何もあら
くめて度し

八月廿九日

よしすけ

かへすくもみなくさまへよろしくおんつたへなさるべくそんじ參
らせ候そもしさむさおんいとひかかんもしそんしり

おふみとのへ

旨

一三九 大和國之助書翰

「榊取素彦宛」

文久三年九月三日

尊翰難有奉拜見候此程は三田尻へ御苦勞之義奉存候嘸早御配慮奉察候此
 間奉願候御備付へ早速御書加被成遣段々難有奉存候御多忙之中御手数懸
 候段奉恐縮候さて尊君之通二侍御史退役實に残念到極之到往々之處如何
 相成候哉と案申候二侍御史御引せ被成候是に替り候人才有之候哉 兩
 君公之御正意貫徹仕候様御世話申上候者早速御周旋奉希上候見安く有之
 間布と奉存候唯々俗論家之一騷仕候こと當惑仕一はなをくじく位に三
 人之者と御替被成候は此時に當り片時之暇もおしく思申候就は僕の
 事迄も色々申立候様子甚奉恐入候右故昨朝清水大夫は存意之處い細相噺
 置申候僕共は如様被仰付候も不苦何分正邪之辨相立候様之御詮儀待居
 申候先は御請のみ申上候餘は拜青縷々可申上候草々頓首

九月三日

尙々昨日已來不快に引籠奉恐入候追々僕共論は御聞可被成と奉存候
 乍憚心中御察奉願候以上

大和彌八郎

小田村文助様

内啓御請

一四〇 寺島忠三郎書翰〔來島又兵衛等宛〕 文久三年九月廿三日

二白和作よりも段々可申上候間御照合可被下何分例之亂筆に存知
 も危ふみ居候位に御座候間其義は兼御斷申上置候

浪華之御別は殊更に匆卒に何も不盡得今更千萬殘緒奉存候其後御一紗
 様定御清康御順能御著被爲在候半と珍重不斜奉恭賀候野子も夫より直
 様上淀翌十九日曉伏邸に著仕候處先日と相違仕段々嚴重之模様相窺少々
 躊躇仕候得共何分にも今一步之處に断然と上着不仕は萬々事不分
 明と存子刻着邸仕候も早速桂小翁へ一面事情荒増承知仕候何分尼ヶ崎淀
 は格別に嚴重且道すからも大に氣遣敷誠に恐々罷在候陳其節迄之義は木

主翁御着之上に委細御承知可被遣候其後も餘れ大變動も無御座候得共何分奸計は益極に入り遠大に謀候義に被窺一々眼に觸候事而已に御座候如何程侯伯列も嘯在候共皆々御體つくはくらひの心底就中因州共は近日も随分讀み飽程な長建白仕候得共是は彼の大分之僻物故見懸は一通り尤之言分に相聞候得共縮處は御上手に義徒に諂ふ心得と被窺是等大に人心を迷し候様に相成却加賀杯之如きに勝る邪魔物に御座候阿州も薄々承候得は親玉が俗説を起し國中は大に沸騰候様子に正議徒は段々苦心仕候様に相聞此事は大に可憂事に御座候加之今日之風評に大和勢之旗色不宜由大に苦心千萬之義に御座候何分にも斯る都合に相成候は御國之義は今更改と申譯にも無御座候過日外狀に不構早々之回復之大策御注意之段は申も餘れ疎之到御座候得共精々御工風專一之御義奉存候丹州之義も模様致兼平野二郎御國へ罷下候由是は當仁か萬々按心之人物に候得共足らぬ愚見より事之先後を考へ候得は餘れ都合十分に無之共に

は有間敷やと被窺候夫と申も何も見留候義も無御座候に付左様に申も餘れ臆量かも不知候得共何分にも無取替御方々を御迎ひに下るが良は少々手之附候上に可然其上丹州一發と申事は最早野夫御國に下候節御當地にも彼是風説有之位此節は當地にも至處之風評と相成愚夫愚婦寄合咄と迄に相成候勢には逆も十分之見込は彼仁におゐても有之間敷に付第二之中策に出先御迎と申議に仕候事に無之哉と是も彼御列之幾重も大切なる所より斯る趣之事に御座候得共彼是之都合に愚見には甚無覺束過慮仕候是又精々御工風被爲在候様疎なから申上候何分當所之形勢も麻紛に事事實丸々不分明暮に動搖之沙汰事何とも見留難く況や野夫も彼久坂君轟と連名之書面より少々は嫌疑有之候様子に承知仕邸監よりも大に公然横行之事は異見に逢ひ彼是に外情探兼只今には和作折々他行仕候位に外交も餘れ無御座候日々之變替不承知之事多く込入候今日承候得は一不合點之義は關東彌拒絕之手筈に相成候斷然十四日と

かには應接に及候由元より滅前之燈にも可有之候得共感心之義に御座候
夫に付少々懸念は先日來有栖川新宮御東下之御内沙汰をは色々木圭翁始
之盡力より一應は屹と御差留之御都合に候處又候此度は水之物共も彼婆
心より思ひ出し是非其義を希ふかに承り大に一同苦心仕居候何分此一本
槍を別域に離しては大基本之回復大に御手不足に相成候義は彼仁等は思
も出さず只管に私誠心を持途候所存と相見殘念之事に御座候一同は何處
迄も御引留仕度所存に罷在候百事百端御通申上度義計に御座候得共兎角
無益之事を引延其内に退屈仕且事實不分明之事多き故に猶更喋々敷相成
此度は先あらまし如此餘は變動次第可申上候隨分御一紗様御自愛御疎被
爲在間敷候勿々謹言

九月廿三日

兒島豊二郎

來島中邨久坂佐々木

其外諸君座下

大和高杉諸君へも御通可被下候以上

一四一 寺島忠三郎書翰〔実戸左馬之介宛〕 文久三年九月廿九日

冷寒之候先以御清剛被爲在候段珍喜不斜奉恭賀候陳者尊御地之近況も格
別之變動も無御座候得共大容日増嚴重に奸計を羅織仕遠大之根本を施し
候振に相見就中近日八幡におゐて祈禱之一條全中川宮奪位之企存外之
事柄に於一同も仰天之至奉恐入候就るは實以天日之明滅之所關不容易
大變義に候得は如何様にも微力丈け之分限は盡奉り度心底は御座候得共
何分にも別段之見込も無御座心配仕居候何卒い細和作より御承知被遣十
分之御高慮御國にも被仰遣此時こそ上様にも御盛願に被爲報候御輔
賛被爲在候程萬々御疎も被爲在間敷奉存候爰元にも一昨夜烏丸殿へ内
々言上仕候得共御當處は御表大納言様御薨去に付御存外之御盡力も六ヶ

敷被仰聞候夫に付御當處より關白殿下へ被仰上直に言上相成様之御心配御頼仕候得共兎角之都合に不其義も不相叶今に不は遂に一段も無之次第奸計は日々盛り此往之動搖は如何哉と懸念而已に不更に致方無御座候何卒萬々御國へ委細に被仰遣候事第一之御義と奉存候追々御承知之丹州一件も大分手都合宜敷様子に御座候間少々御助力之程は其一楯よりも歎願可申上候間御思食に相叶候丈には御助力被遣候様精々一楯よりも兼々尊仕居候餘は萬々變動次第に可申上候恐惶謹言

九月廿九日

寺島忠三郎

二陳 御上京も段々御差支御座候様子如何被遊候哉此節は實以嚴敷敷中に罷在候氣味に不餘れ御苦勞と奉察候随分時候御厭御氣體御自愛專一之御義奉存上候何も和作方直々御承知被爲在候様奉希上候以上
肉 戸 様

尊下

一四二 寺島忠三郎書翰

〔來島・桂・中村・久阪・佐々木宛〕

文久三年九月

追白

先達申上候邸監之義御評議早速可被爲在候様奉希上候何共不運に不第一飛脚杯に不も御用とか申尤之事には候得共斯る重大之變動は片時も早く御通達仕度候得共不時に込入候必竟御一統之内早々一兩人何も角も御合に不御上京奉希上候同志上京之義も四五人は此元迄來込其餘は入洛も六ヶ敷候間大坂か伏見邊迄は四十人計は兼不揃居不申不は逆も十分には此元も出來不申手細といふても餘れに不此度之義も委細一人歸國に不意味申述度候得共和作一人に不何も角も不都合千萬殘念之至に御座候とふそ早く御一統之内御兩人と爰元へ來込内々に奔走之者三四人と且々之同志之者何にても四十人計大坂邊迄來込候様御評議奉希上候以上

大和高杉長嶺松島其外年鷹杯へも宜敷御傳乍失敬奉希上候

來島様

桂様

中郵様

久坂様

佐々木様

其外諸君

一四三 寺島忠三郎書翰〔長藩同志宛〕 文久三年九月頃

本書殘申候

先日烏丸殿へ拜謁之節被仰候は澤主水正といふ人物は精々氣遣不申而は元來不面白人物故大事か不意之處より破候様にも成行候間其義は兼る其方共同志中へ申遣し心得居候様との事吳々御申聞有之候間烏渡其段御一

紗丈け之御心得之爲申上置候以上

同日

追啓和州一黨之内大坂邸懸込之義に付御沙汰有之召捕候様之義實以面倒之事柄に人望之關係せる處は中々大に御座候間一先此御方へ預り置嚴重取籠置段歎願に相成るは如何哉之段肉翁へ只今申越候肉翁は如何之高決に候哉是等之義大に小事之様て人望に係り今日に於は世上一同目を附我藩之所置を見合居候故に御座候

忠三

皆々様

座下

一四四 前田孫右衛門書翰〔榊取素彦宛〕 文久三年九月廿八日

尊墨被爲投盟嗽拜誦如高喻寒雨鬱々布御座候處益以御安健に御起居奉敬

祝候陳私出處之義に付御懇諭之旨縷々被仰聞委曲敬承仕候然處先日御役御斷申出可然段内移り有之候付恐入相愼居候處尙又思喰之旨被爲在御役不被差替候付氣分取繕出勤仕候様御沙汰を蒙り殊に御兩殿様を厚き被仰聞之旨も有之候付不堪感激一先快氣仕候處人心益沸騰御兩殿様不通御苦慮被遊稍御鎮定之姿に相成候付一先御斷申出候元々沸騰之砌は一步も屏き候心底は無之決死御奉公可申上と覺悟を極め押出勤も仕候得共斯く御鎮靜に相成候得は御威光も相立候事に付一先退役仕候方御國家之御爲と奉存候人心背反之巨頭其儘政府に罷居候は此往又如何様之沸騰之程も難計其期に到り又候御兩殿様御苦慮を奉掛候は實に相濟不申候且微尠之身には候得共舊年も出處を誤り又此度も同様にては實に古人に恥申候旁に付是非退役可仕と落著仕候私心事別番之通に御坐候間御憐恕可被下候爾し見込違之義も御座候は尙又御高諭奉希候御用談役も玉山二翁にて事足り可申候黃吻之私兩先生之上に出候も實に安し

不申私苦衷之段御憐察可被下候心事毫端にては難申解候間書餘は拜青之上縷々可申上取紛貴酬迄匆匆申縮候頓首拜啓

晚秋念八

再伸 幾回も御懇諭之段奉感佩候尙又六穴銃之義被仰遣御所望仕度段先日粗御約諾仕候處實は急に入用も有之候付楊井謙藏崎陽より歸り候付相謀り候處一挺有之由に付其分を所望仕候其段可申上と含居候處等閑に打過奉恐入候右に付何卒脇方御拂被成遣候様奉希候はけ口無之候は私心配仕候御口入可仕候御違約に相成候段多罪之極に御座候得共差急き入用有之候付無餘義右之取計仕候此段御寛恕伏奉希候孰れ拜青之上御斷萬可申謝候又頓首

大亂揮文章轉倒御推讀奉煩候

陸 濟

拜復

小田邨先生

函丈

一四五 前田孫右衛門書翰〔藩廳宛〕 文久三年九月

私義政府或は君側等所勤被仰付多年尊攘之御手傳申上候處不圖も掛の御危急差迫り御兩殿様不容易御苦慮被遊候段彌以深く奉怖入候就るは無是迄も御役御斷可申出筈に候得共此御危急之場を見捨退役御願申出候も臣子之情におゐて不忽義有之候付京師之御條理相立候迄と考忍愧今日迄所勤仕來候處物議沸騰仕候故歎御斷申出可然段過日御内移り有之候付怖入相慎居候處猶又思食之旨被爲在候由にて御役不被差替候付氣分取繕出勤仕候様御沙汰を蒙り殊に御兩殿様之厚き被仰聞之旨も有之誠以難有堪感激不申候一先快氣仕候處人心益沸騰仕御兩殿様不一通御心痛被遊候段奉想像候は何共申上様無之日夜啼泣罷在候處竟に御誠意を

以物議御鎮壓被仰付誠以難有御事に奉存候然處人心背反之巨魁此儘政府罷居候は此往又如何様之物議沸騰之程も難計其節に至り又候御兩殿様之奉掛御苦慮候は實に相濟不申候付氣分も處全相勝不申候間一先御役被差替候様奉願候元之物議沸騰之砌は一步も屏き候心底は無之決死御奉公可申上と覺悟を極め押出勤も仕候得共斯く御鎮靜之姿に相成候得は御威光も相立候事に付一先退役仕候方御國家之御爲と奉存候且微渺之身には候へ共出處失度後人之誹謗を招候は遺憾も不少義に付一先願之通被遂御許容候様只管奉懇祈候私退役被仰付候へは御家來中之氣方も一變仕竟には御兩殿様御苦慮を被爲安候期にも立到り可申左すれば私に取候も本懷無此上事と奉存候間旁之趣篤と被聞召分執之道素願旨相達候様不堪千祈萬禱之至奉存候頓首敬白

前田孫右衛門

一四六 久阪義助願書

文久三年九月廿九日

但馬國産 達 藏

右拙者京都詰居中召使此度御國迄連歸候處關門御嚴重他國人御取締被仰付候折柄に付三田尻表へ差控留置候然處生質至極奇特之者に不疑敷義は毛頭無御坐候間山口表にても召使相成候様格別之御詮義被 仰付度願上候已上

九月廿九日

久 坂 義 助 花 押

一四七 久阪義助書翰

宛名欠 文久三年八月九日頃

九門内之賊兵を追拂公家門其外嚴重に相固め七卿復職 朝政御恢復之義は今日之急務勿論に候大兵東上仕らすては逆も成就仕ましく候然處熟考仕候得は 君上不取敢御出馬被為遊候義はいかにも 神州之命脈にも相係候に付草卒に被為在候亦は恐多次第に候先何時も御出馬之御用意にて

急度天下之機會相見定之上九天之上に被為遊度候今日之第一著は奇兵を御用被為在候御場合に可有之候併し奇兵にては會薩壓倒 朝權を取返し候程之義はいかにも無覺束被考候に付夫々は或は大和之義兵を援け或は石州銀山を奪取或は豊後日田を乗取或は但馬久美濱に押渡大和之應援をするかにて可有之左様候得は 輦轂下之賊兵も己か住處之安危を顧み自然瓦解可仕は必然にて候其内には急度七卿御同伴被為遊 君上御出馬 朝政御恢復之機會出來可仕候事 七卿之御存亡は即ち 天朝之安危に候得は是亦草卒に御動搖不可然候機會出來次第 君上御同伴御上京被為在度候事

人数澤山に候得は前書之通數所に義兵を舉度候少人数之事に候得は一途に大和に據り天誅組を援根據を固するに如く事有之間敷候事

一四八 木戸孝允書翰

久阪義助宛

文久三年十月十四日

昨晚は御光來奉謝候彌今朝より御歸萩被成候哉弟心中何分にも不安爰元
長く留り居候心底は無之人に逢候も赤面に不堪せめては 君上御忠誠之
處天下に暴白致し人之向背を定め候處なりとも盡し度此段御諒察被成下
大夫へ御逢も御座候はよろしく奉願上候勿々頓首九拜

十月十四

尙々早々御歸り奉待候弟も是非々々一度は歸萩仕度來良遣孤も氣にか
ゝり申候拜

桂

久坂様

御密披

一四九 兼重讓藏山田亦介書翰

氏家彦宛

文久三年十月十九日

一筆致啓達候三田尻御警衛方諸御手組先達を荒増逐詮儀致御談候處別昏

御氣付之趣付紙を以被仰知候付致熟考其向にも申談候處廉々御尤之儀
に被相考候付別紙其儘致御返候間本文尙御氣付筋之趣を以諸御手組早々
相整候様御取掛り可被成候左候御沙汰難行詰廉も可有之且又有廉御沙
汰筋等に其御役座におゐて御取計難相成儀も可有御坐候付早々被仰越
候て御當役方へも申返何分御沙汰相成候様取計可致被存候何分共肝要御
場所柄に付御警衛方規則屹度不相立候御當役方にも御氣遣被致候間
無御疎儀にも候得共片時も早々御取掛り相成候様にと存候恐惶謹言

十月十九日

兼重讓藏

壯花押

山田亦介

公花押

氏家彦十郎様

○編者註 本書者兼重讓藏之自書也

楳取家文書第一 (文久三年十月)

一五〇 前田孫右衛門書翰「榊取素彦宛」 文久三年十月晦日

芳牘辱薰誦益御多祥に御動止奉至祝候陳杉德輔御遣方之義被仰下承知仕候然處御使者人物は最早御撰定相成申候先生を孰へか御差向に相成候様にとは過日建白仕置候處其後不快にて七八日も出廳不得仕候に付即今之御僉義振得承り不申候折角如何相成候哉と案居候陳又先日拜借被仰付候名和氏記事并研志堂詩抄只様留置申候御蔭にて難有勤 王家之系譜を諳し實に堪感泣不申候則四本完璧仕候間御收手奉希候且又於京師御預り仕置候春水翁其外張交之御幅是又遺忘に打過只様留置申候則返璧仕候間御請取可被下候先は貴酬耳草陳頓首

十月晦日

前田

小田 邨 様

奉復侍史

一五一 瀧彌太郎書翰「久坂義助宛」 文久三年十一月四日

昨日荒増御談申置候京師行人數之義に而歸陣詮議いたし候處病氣或は隊中にとゝめ不置ては不相叶分も有之更に致人撰姓名付役割付等差上候間御落手可被下候右之人物屹と御役に相立候間無御懸念御召連可被成候草々頓首

十一月四日

瀧 彌 太 郎

久坂義助様

一五二 佐久間佐兵衛書翰「宛名欠」 文久三年不詳□月八日

御警衛諸藩に爲挨拶主計殿廻勤有之度段昨日申進置候處定而漠然未運に

可有之千萬乍御手数今朝貴兄御誘引手ばしこく相濟せられ候様御催促可
被下候御酒肴も贈入被仰付候筈に候得共此は別人を以被仰付候間御含可
被下候

以上

八日

一五三 久阪義助書翰〔妻宛〕 元治元年正月十九日

あら玉の年の始に相成候得共さむさなかくにさりかね候處御さわりも
なく御年越と悦びわれ事もかつくにくらし候まゝ御あんもし給ふ
べく頼り拙者京都にのほりしのちもたんさくなどいかにもきびしく
ありてまことにくこまり入りくはしき事は先日十藏かへり候時
にておんきなされ候事とすいもじいたしりあらくめて度し

正月十九日

よしすけ

尙々御用心なさるべく申もおろかにて候杉みなさまへよろしくおんつ
たへ頼そんしり已上

お文とのへ

尙々このどうふく小ばかま一つは吉田小太郎とのへ一つは桑次郎に紅
の帯一筋は杉おとよとのへまいらせ度おくり申候これとはし玉のしる
しまでにて候

桑次郎事まいり候やはやく成長せよかしといのり居候事に
て候し

小田村文助とのよりよろひたれ頼來候處いまた調ひ不申候に付と
のひ次第おくり可申候事

一五四 澤田震書翰〔榊取素彦宛〕 元治元年正月廿一日

去歲御尋申上候節彼是の御馳走になり難有存居候其後より今春迄三田尻に被引留淹留仕居候委曲御序之節は眞木泉州より御聞取被下度抑頃者京師の形勢甚以難陳き次第に候滑賊跋扈朝廷を擁塞し噫實に可慨也定る御承知は被有候へとも愚之所聞見を盡す耳に候頃者又三條橋詰之諸札に盡く忠正之士と認め候らは立處に可討取との令觸れ候程にて實に不堪憤懣候尋るレンギトウと申人去十三日の夜の事と承り候に木屋町通三條下ル處牛車路に斬せられ目口を手拭に縛り手足は勿論繩に縛り背十文字に載斷在候と務る艾除忠正之士する農夫の草を艾如に御座候吾等實に不堪憤懣意任筆而發辭衝吻而書而展紙乍然至于此而止矣

正月廿一日

震

頓首

上 小田村先生座下

御序に此書狀三封一は眞木泉州へ御差出可下候一は笠間之人加藤有隣と申儒者に御度可下候一は奇兵隊之本陣詰に長三州先生へ御傳へ可下候以上

(封表) 呈 小田村先生座下

震

一五五 澤田震書翰眞木保臣宛 元治元年正月廿一日

爾後春寒猶難去我等唐突之事故御怪之程も有之候が前以申上候通來春は歸京之由を願上候處或は沮拒之計なそ巧み申居人の有由承り候故其は由なしとて始末仕候我等五人之者計り京坂或は讃州などに伏匿仕居候存念に聊盡力仕度旨御亮察可下候佐々木男也定る御忿にも被遊候か宜御傳可下候草々不乙頓首

正月廿一日

眞木先生

澤田震拜

一五六 澤田震書翰〔長三洲宛〕 元治元年正月廿一日

兄臺と相別る後異船東來之砌辱御手書私共不及なから御案申居候其中私共一寸不得意之事も御座候に付決然と脱走仕入京致候頃は京師之形勢定る御承知も被有候哉甚以難陳言語同斷之始末に候然とも別に差變り候事も無御座候彦山之事は如何に候や宜柏木民部君阿部豪一君水谷左門君へ御傳語可下候先は草々不一

正月廿一日

澤田震

三洲先生

一五七 久阪義助書翰〔妻宛〕 元治元年三月廿五日

たびくふみ下されまづくさはりなくよし安心いたし候拙者も去十九日御用ありて山口までかへり候御あんもし下さるべく頼りせつかくの事ゆへ

御先祖之御はか參をもいたしたく候得ともこのたびはいそぎの事といひかつまた水戸のひとなどつれ相もある事ゆへこゝろにまかせ不申候条次郎も無事にくらし候よし大に安心いたし候何もはやく成人して御用に相立候様相なりかすと夜に日にいのり候事にて候これもひつきう親のそだてなればよくくも御氣を付られおしへさとし候事かんもしとそんしりさて去四日京都東山の靈山と申ところにて

御先祖之まつりいたし

御神位もそのところの神主村上丹後と申ものゝ方に永代祭くれ候やう頼置候さやう御心得なさるへく候此度はみぎの次第ゆへ条次郎などへもな

んのみやげもなくきのどくにそんしりいつれ京にのほり候上は大小
をもとのへおくり可申候杉みならへよろしく御つたへなさるべく候吉
田年丸も此内より上京いたし候に付年丸のはへ御傳へなさるへく候す
こやかすぎるほどすこやかに候おりあらくも

三月廿五日

義助

先日杉おとゝらおんかへりに付何もおんきとそんじり小太郎と
のおとよとのにも例のことくみやけなくいかにもきのどく千萬にて候
大谷中井へもよろしく頼り

お文とのへ

尙々下女などはおんおきなさるべく候

一五八 粟屋族書翰「楳取素彦宛」 元治元年五月廿一日

朶雲奉薫誦候時下濕暑之候倍御健適可被成御起居奉恐賀候二小子儀瓦全
送陰仕居候間乍憚御降念可被下候陳者此節膚情不測之風説御見聞之次第
山田耕三は委曲御申聞迅速御差返し被成下寡君にも縷々承知被致辱次第
被存候此程は馬關沿岸戒嚴之儀迄も湊々被仰聞御懇情之段弊藩一紗奉萬
感候耕三儀も近日又々出崎可仕其節は不相替御駆曳伏奉希上候右積る
御挨拶御頼貴酬旁取束申上度如斯御座候尙期後音之時候惶恐謹白

五月廿一日

粟屋族

崎陽

景恒花押

小田村文助様

侍史

再陳 爲 國家御保護奉專祈候以上

一五九 月形洗藏書翰土方佐久間・野村宛 元治元年五月廿一日

任幸信謹啓仕候 各様愈御清福被成御座奉欣慰候先般態と弊藩の御來駕に相成殊に御周旋被成下候趣追々傳承仕元來 天朝之御爲には御座候得共於弊藩誠以辱仕合に奉存候其節不圖も賤名御傳聞に相成御懇篤之芳翰被成下薰手拜讀仕候然に折角御來駕に相成候得共萬端齟齬仕思召通相成兼候趣御尤千萬に奉存候於弊藩も有司之御應接は先閣有志輩に至迄行違而已に不敬相働候段御氣毒之至不知所謝次第に御座候其節速に拜復可仕筈に候得共聊所存御座候を差控失禮仕候段幾重にも御海容可被下候爾後晩生儀も是迄之罪籍赦免に相成豚兒の舊祿被復野生儀も自由に歩行出來仕候様相成申候乍恐 朝廷之餘光寡君之優恩には御座候得共畢竟 尊藩之御周旋諸君之御力と奉存東向百拜仕候彌御親睦も堅固に相整追々御寛談申上候様不相成候は相濟不申儀と奉存候猶乍此上重疊爲 天下國家御盡力弊藩之儀をも御心添被成下候様偏に奉渴望候社中も申合一際奮

發盡力之覺悟には御座候得共頑愚之輩而已にて寸益之程も無覺束奉存候此段萬々御諒察可被下候時令爲 國折角御自重被爲成候様乍憚奉祈候右拜答申上度艸々申略候恐々頓首

五月廿一日

月形格事

鹽 濁 洗 藏

詳花押

土方楠左衛門様

佐久間佐兵衛様

野村和作様

侍史

二白 先般之尊書御端書兩件之趣拜承仕候晩生管見之儀は眞木氏口占に托且弊藩之三士の申含置候條宜敷御取捨之程伏す奉仰候乍筆末猶重疊御教示被成下候様深々奉希候以上

楳取家文書第一（元治元年五月）

二百六十七

一六〇 渡邊伊兵衛等書翰「湯川平馬宛」 元治元年五月廿八日

一筆致啓達候御自分様根役方佐々木男也留守中招賢閣御用掛をも兼帶被仰付候此段可申進由信濃殿へ被申付如是御座候恐惶謹言

渡邊伊兵衛

五月廿八日

清花押

天野謙吉

華花押

渡邊内藏太

暢花押

前田孫右衛門

利花押

湯川平馬様

一六一 中村圓太書翰「榊取素彦宛」 元治元年五月カ

先刻は大に失敬併得快晤大慶不過之候

朶雲拜誦仕候如尊慮 世子公下野守へ御對顔被成下候様愚生懇願に御座候條其都合相決候は、必御飛報可申上候萬端宜御周旋伏希奉希候草々不

一 卽刻

中村圓太

拜答

小田村大人

執事

一六二 藤田小八郎等書翰「榊取素彦宛」 元治元年六月四月

一輪奉呈上候薄暑之節御座候處貴君彌以御安寧可被成御座珍重奉存候次に私共無事消光罷在候乍恐左様御安慮可被下候扱出崎中には度々貴邸に罷出實以御厚情被成下萬々奉謝候私共引取候時分御暇乞として貴邸に罷出候處折節御他出之由に不拜花顔誠に残念奉存上候此節幸長岡渡邊氏兩人罷出候間先頃之御厚禮迄不備之拙狀差上度御笑覽可被下候御當地如何之御振合御座候哉不相替醜夷之事而已に不被為得愉快候儀奉存候何れ當夏後には得拜眉可奉伺尊慮候恐惶謹言

六月四日

藤田 小八郎

小川 清助

大村 欽十郎

小田村文助様

玉机下

猶々申上候時候柄御大事可被成御厭候様奉祈念候乍末毫御兩公の御宜敷御鶴聲奉希候以上

一六三 松林廉之助書翰「楳取素彦宛」 元治元年六月五日

奉別後は御疎情罷過背本懐候時下向暑御坐候處倍御清嘉被成御起居珍重奉賀候二小生無異罷在候乍憚御省念可被成下候然は近來御在崎之よし先日は藩生同志之者推參仕候處萬事無御腹臆御談話被下候趣難有仕合在小生大慶之至御坐候且年來尊藩尊攘之御盛舉小生如き一介書生に至まで私心欽慕罷在候へとも御承知之通叢爾小藩殊に昨年來寡君不計幕吏之名を冒し其故同志之者罷出候も如何と存候處格別之御歡接感謝不啻以來は同志も申上候通御往復奉希候一先日對藩畑島晋十郎扇格左衛門等來訪之節貴兄之御傳言も傳致仕難有奉存候しかし貴兄之御在崎と申事は同人等相明不申候故曾て承知不仕

候

一松本謙三郎大和一舉以後尊藩の罷出候様風評有之殊に長岡生昨冬京より歸國仕候て謙三郎は決して死たるには非ざるよし申居候間先日迄尊藩へ罷在候事と存居候處御咄之よしにて始て承知仕爲之悵然者連日一小倉君昨春小生在坂之時を敵邸の御尋被下其砌は河内水郡星之助方の御寓之よし其後は強て消息も不承大和一舉之時は如何被成候や如何様御兄弟之譯を以御承知にも相成候は、爲御知可被下候是亦十年舊交之誼哉此節長岡渡邊二生御伺旁呈寸楮候委細は兩生口頭を御承知可被下候頓首再拜

六月五日

松林廉之助

漸花押

小田邨文助様

侍史

再白 御歸期も相分候は、兩生迄御告知可被下候

一六四 久阪義助書翰〔妻宛〕 元治元年六月六日

あつさのせつに相成候得共まつくおんかはりなくくらされ候よしいかにも安心いたし条二郎昨日まいり久しぶりにあいたい大によるこひ昨夜も一しよにね候条二郎大小も大坂にあつらひおき候得共此度はまにあひ不申候いつれのぼり候上は相調早々さしおくり可申候梅兄も一昨日山口御出かれこれおんはなしをもいたし候事に候此度は何分ちよとなりともかへり度候得共用事しげくこまりおりりなにかいたし見可申候何もあらく

六日

佐々木おはる杉みなる小田村兒玉玉木はもよろしく頼り条次郎は

一兩日とゞめおき候いかにもおとなしくあそびおり候御あんもしなさ
るへく候

よしすけ

留守

名

一六五 佐久間佐兵衛書翰〔久阪義助・中村九郎宛〕 元治元年六月九日

態と奉呈飛札候彌御勇剛可被成御苦慮奉賀候陳は今度御一舉に付京攝の
五拾人宛小生共奉□後原不明之御詮議にも可有御座哉被差越候御様子右之評判
尙信州密登一件等今朝追々小生耳には入大分は今度小生紗轄五拾人の
響と相答置候内要路諸老も右之噂追々迫り被問候に付小生は未だ不承
御詮議候得共左之様にも候は、定而越州大人數統率東上に付浪華邊迄も
御人數被差出京師之動靜御試可被成との御主意共候哉など相答置候内右

京攝に被差出候人數久阪玄瑞一同被差登候杯と御沙汰も出候哉にも申觸
紛らかしも難相成様當表に専ら流傳仕候に付苦心罷在候内先刻少輔杯
も來話折角其邊申合密々同嘆仕候儀に御座候間乍御疎儀にも可有御座候
得共今一層御秘運ならては大事失著に可相成様と奉杞憂候間尙又被仰合
候様奉存候信州密登之處は可壅蔽勢も無御座候ま、定而上阪賊軍一散に
も候得は十分とも不存候得共いつれ御 上京ならば此節共歎と相談に罷
歸候付大物見處にも被差登歎に格別御様子之有之儀には無之様申聞置
候尤も此等は來訪之常人應接之都合には無之山彌山吉祖宗等之處限り其
外未だ尋常官方は不承候得共上京後人數御沙汰相成候哉に相見追々風評
も取々に御座候間其邊御含御用慎專要に奉存候小生も歸途來症熱大發漸
今朝快起多客に未だ門外も不得仕風情旁明後日ならては出山難相成
御引請一件も御繁劇に可有御座候得共越州持參之建白書先日來追々奉得
御意候様御深思被成下候様奉願候いつれ拜鳳可申上候得共其内前條差急

き奉入貴聽度草々申上略候頓首

六月九日晡

義濟

再伸 御秘運專要に可申上御着意可相成候已上

江月老兄

白水仁兄

侍史

一六六 眞木保臣書翰〔榊取素彦宛〕 元治元年六月十五日

謹啓時下溽暑益御清適奉賀候次に鄙生依舊劣々罷過申候乍憚御放念可被下候先頃は御懇書御投下崎陽近況縷々被仰越千萬難有奉謝候於馬關は日々被相待候由に御坐候得共何之音も無之例之虚喝に候哉洋夷之事は惣不可解候近來は横濱に頻に迫り候哉之沙汰も相聞申候扱坂田諸遠とか申

仁公卿方短冊至懇之由則一二葉つゝ申請差上申候鄙生も御國一策中に相加鳥度上國邊に罷登申候既に明日發足と相定申候右取紛中倉卒申上候頓首

六月望

平保臣

文助様

一六七 山口藩政務座達〔湯川平馬宛〕 元治元年六月廿五日

干城隊

右

御思召有之赤間關出張御引せ被成三田尻に轉陣被仰付候事
別番之通被仰付候に付差越候間屯處御仕構相成候様にと存候以上

六月廿五日

御政務座

湯川平馬様

一六八 前原一誠書翰「湯川平馬宛」 元治元年六月廿五日

一筆啓達候然其御才判問屋口明吉丸船頭徳藏と申者先年來薩州に致往來不正之荷物取扱候趣風聞有之候處此度彼國より登り掛豊前田ノ浦に致繫船候と奇兵隊を聞付過る十一日罷越召捕候に付船頭舸子之者共打廻り候者を以様子取調せ候處別紙聞書之通に此度も砂糖煙草等積入致候由御時節柄をも不辨不届之所業に付徳藏事べり付にして山口表に連越せ舸子之者は不殘本船に乘組せ目明し手先之者付添積荷之儘御地乘廻し致せ候間著船之上舸子之者共徳藏御裁許濟迄は他國出行は勿論其外兼之御法も可有之候に付何分之御沙汰可被成候且舸子之者共差返候付は夫々組相之者にも呼寄引渡可致之處往返彼は迷惑筋も可有之と手先之者付被成候右爲可得御意如此御座候恐惶謹言

添差越候付往來旅料等之儀は御見割を以相應被就御氣候様にと存候且積荷捌方之儀は山口に申越置候付何とか御沙汰可相成候間旁之趣御承知可被成候右爲可得御意如此御座候恐惶謹言

六月廿五日

佐世八十郎花押

尙々御才判内別紙付立之船頭共徳藏同様之所業致候様子に相聞候旨付無御疎儀には可有之候得共精々御詮儀相成候様にと存候以上

湯川平馬様

一六九 井上少輔書翰「榊取素彦宛」 元治元年六月廿六日

拙翰拜呈仕候時下酷暑に御坐候處益御清康可被成御在務奉敬賀候日増切迫に時勢に付は萬事に付別御配念之御事と奉恭察候過日京師之變動に付は不容易次第に付於山口表御三末岩國様にも御寄集ひに相成此節

御議論に御坐候何れ此儘に不捨置御人數にも御登相成候事と奉存候已に福原太夫先達を京師の發足に相成國司君兒玉君次て上京且益田太夫にも上阪の御内議被有之候由に御坐候長府も先日山口の被參居候處今以歸府無之御決論に不相成儀奉伺候此一舉實に家國の御浮沈皇國是に立と不立との場合一朝一夕の御決には不相成儀と奉存候付るは彼是と御配念奉推察候野州一舉頻盛大の由に相樂居申候尤水府引取候様にとて幕命下り候哉之下説御坐候得共此義徒容易に引退候者に不無之と奉存候右の外に浪士の一舉御坐候に哉相考申候御當國の食客先日上國に相成申候爾後京攝の内格別目に立候程の事は無之由に候得とも會藩の威強大に諸藩より終惡の候様に相成申候由何れ不遠正邪の辨可相立と奉待候

一横濱の軍船數十碇泊有之由に近日又々襲來の風聞も御坐候其地の御様子は如何哉奉存候將又此度小銃買入の儀に付金子持參に林太左衛門

と申者其地の差遣申候兎角は乍御面倒着の上は可然御差圖被成候様に伏す奉希上候當境委細の様子は此者の御聞取可被下候先は暑中の御見舞旁依好便如此御座候猶期後鴻候恐惶敬白

晚夏念六

井上少輔

小田村大翁

侍史下

二白 時下別を御自愛專要に奉存候本文小銃の儀に付るも諸事宜御周旋奉希上候取紛書損亂筆御免捨奉願上候以上

一七〇 山口藩政務座達「湯川平馬宛」 元治元年七月朔日

一筆致啓達候志道聞太士御雇伊藤俊輔事姫島碇泊の英船の被差返候付今夜山口出足其元迄被差越候付西ノ浦邊漁船御雇入密々被差返候様にと存

候此段可申進由清太郎殿被申付如之御坐候恐惶謹言

七月朔日

御政務坐

各 中

湯川平馬殿

一七一 杉孫七郎書翰榊取素彦宛 元治元年七月十五日

尙々幾回も御自愛奉專祈候瀧氏よりしく申上吳候との事に御座候御使者も別番之次第也筑は若老上京に相成候は、極々宜敷候得とも覺束なく相考候馬關應接は間違なき事に御座候赤松の人数出張近日小倉領へ入込候様子に御座候○夷情如何や後便御申越奉祈居候歸山候得は少々は相分可申候間可申上候也
殘暑嚴酷に御座候處彌以御多祥可被成御滯崎奉恭賀候先達を御懇書御投

寄拜讀仕候私方は御無音計失敬奉恐入候此度瀧氏同道に筑前田代二地爲御使罷越申今日歸關仕候都合相變り候事無御座候崎陽御滯留中嘸々御配慮多々と奉推察候岡氏無事石藝の私同様之御使者として出足最早歸山と相察候御國形勢は先日坂本かん方申遣候由に此度は不申上候都合静謐に御座候間御懸念被成間敷候差急き歸山仕候を何か多忙故亂筆御推讀奉冀候書餘又々後鴻可申陳候時光御愛護奉專祈候先は御見舞申上度如此御座候恐惶謹言

七月十五日

德 輔

重花押

文 助 様

玉案畔

一七二 井上少輔書翰「楳取素彦宛」 元治元年七月廿五日

除炎難退御坐候處彌御清健可被成御滯崎奉拜賀候陳者別紙寫之如昨今兩度に大坂來狀御坐候付爲御知申上候風聞書之儀に付何分之儀は不相分候得共上國大騒動之趣と相聞申候右に付おは備後小之道迄少將様御越被遊候得共如何之御様子哉上之關迄御引返し相成候趣に付長府おも即刻出立にお左京亮殿にも山口表お被參候其上襲來も差掛り候旁苦心罷在候久阪君宍戸君竹之内君高洲君御身上如何哉と掛念之風聞仕候其外は一切相分不申候追々可申上候右之形勢に付おは小倉おも肥後よりも人數等出張之風聞も有之候何分京阪之様子如何哉と掛念之御事奉存候此上は彌御浮沈之御處置相成可申候小子事は馬關在勤被申付短才無智之身只々恐縮罷在候一死之外他念無之何れ近日又々一大變も可有之と奉存候右は船便有之候旁荒々御報知申上候御推覽可被下候別お取紛罷在亂筆御用捨奉希上候先は爲其如此御坐候書外若得一生候は、後便又々可申上

候不具

七月廿五日夜半

再白 爲國家時下御自愛奉專祈候拜白

少 輔

拜白

文 助 老 兄

内呈

一七三 山口藩政務座達「湯川平馬宛」 元治元年八月四日

一筆致啓達候京師變動之趣に付別紙之通り被 仰付候に付相心得居可然向々お御沙汰可被成候此段申進候様御當役方被申付如斯に御座候恐惶謹言

八月四日

御政務座

各 中

尙々本文之趣隊中の御通達可被下候以上

湯川平馬様

京師變動之趣は何とも奉恐入候得共右は浪士鎮靜之爲罷登候もの共不處置を差發り

宰相父子におゐて一圓不存事に付其段は及御届置候通可及應接に候事

右は幕府の人數差向に歟其他他所人の對し御趣意筋不取失様申聞應接振之大意其向々役々の前斷之通書取にして渡置候様被仰付候尤應接におよひ候上不得止及亂入候は、決戰勿論に候事

一七四 檜崎彌八郎書翰楳取素彦宛 元治元年十月十七日

芳簡拜讀仕候先般御辭官之由何共裂腸之至に奉存候此節は御閑坐浩氣御培養之由御自樂此事に奉存候乍去唐人と違ひ耳目に入る事は皆痛心之種と相成只管腹笥之乏を歎し唾手挽回之時日早々至れかしと仰天默禱仕候事に候矢十々承り候得は長府林氏今宵貴家御尋仕候由申も疎に候得共懇に御諭告長府には必一奮發有之候様御盡力奉願候獨力挽回は六つヶ敷可有之候得共内藏介蔀清左衛門勘九郎揃ひ候而御供にて罷越候は、隨分挽回之端緒位は開け可申奉存候其期に至り候て何方をも陰補冥助相成候事に付府公早々萩御出有之度候岩國退去に付少しは道も明き可申と奉存候萬拜晤ならては難盡候得共爲右草々謹復

十月十七日

再伸 御高什奉感心候欲和不成閣筆

義 拜

歸耕堂先醒

一七五 松島剛藏書翰「楫取素彦宛」 元治元年十月廿五日

向寒之砌御舉家御安全珍重抔喜之至に存候拙家無異御放念可被下候扱近日之形勢案外之事に相成御互に不堪悲憤に候最早言語文章游説等に而挽回之目途無御座誠に苦心此事に存候貴地近日之模様如何相成候哉定而日々賊焰盛に相成候半と致遙察候申も疎深々御戒嚴肝要に存候猶又崎陽御買物代金は先日山口に差出候處早萩に御引取後に付取歸り申候孰當月末には役所手子文輔と申者歸萩之便りに付托之合に罷在候小生も日々退役之御沙汰相待申候先は時下御見舞旁如此に御座候謹言

十月廿五日

剛藏

久敬

二陳 幾重も隨時御自重肝要に存候御渾家様は可然御致意是祈御近所

玉翁見込は如何何そ議論可有之何卒承度儀に御座候已上

素太郎様

梧右

一七六 楫取素彦手記 元治元年十一月

申殘候言の葉

一 邪正混雜善惡錯亂之時節柄に候得は我々身の上御裁許振に而は遠島獄舎又は減知沒收如何様に立行候も難計乍去我々事は御主意を承道理を不枉様心懸候事に候得は天地神明に對し可愧とも不存候故即今罪の有無喋々敷申分は不仕天道は循環無端ものに候得は只今の時勢左迄に永續可致にもあらず我々の冤枉も霽候時節無之とも難申かゝる困厄を氣の毒とは被思間敷候昔年松陰兄の其元達に被申殘候歌にかくあらんをば武夫の常とも被申しは此時の事と思ひ合さるへし

此往は我々心を察し貳人の子供を養育いたし忠義之道を訓導し賤敷淺ましき見習不仕様心を被用候儀頼入候事

一むかし管丞相は博士の御家柄なれ共

宇多天皇之御寵愛を以て三公と申

朝政の御相談相手に被爲成藤原の時平などその御上首尾を妬妬カまれ終に太宰府に配流の御身と被爲成候去りと亦も管丞相の御誠忠は萬々年迄も光り輝き天滿宮と御崇敬仕り時平の仕打を悪まぬ者は無之我々か不肖を以て管丞相にくらへ候儀はもつたいなき事なれ共

御上の御寵愛をうけ御直の御用筋迄も承り奉遂其節候は菅公之

宇多天皇に御信用あらせられしにも似よりし事なれば外々よりの嫉妬讒言を澤山に被り候事本より其筈とも可申なり依之罪名情實に浮き候儀恠敷儀ともそんし不申身柄にてケ様穩に落着を付居候得は家内は本より骨肉眷族に至迄 上を怨法吏を慘酷と思ひ怨らみ歎かれ間敷候

一此迄は御役の餘澤に而篤太郎桑次郎共の身の廻りも腰物類雪駄下駄等に到迄人並に劣らぬ様相仕立尙筆墨紙其外不足は見せ不申候得共家門之衰薄に向候より已前之見慣を打棄不自由を忍び富家の子弟を見習不申様嚴重に申聞せ肝要之事に候身柄幼年を父上に離れ三人の兄弟母上之養育を以て人となるを得たりその節の事を思出候得は所帶邊も甚貧乏にして物習を可致風情も無之母上賃引織は糸の餘力にて筆墨の買出迄も被成候位何も我々不自由を忍び物習も心懸候得は今日に到り且々人並に劣らぬ様成立出來候以來は此方幼年の事を思ひ出され母上様の御辛抱を手本と致し子供等に不自由をこらへさせ養育あるへし

一身柄十二歳にして小田村姓を嗣き爾來艱難流離之身と成り廿一歳にして江戸へ罷登り永詰中母上様方亡き人と被爲成五ヶ年を経て歸國に候得共我家と定りし内も無之御親族中の厄害と成り氣兼氣苦勞に打過候處其元共當家に嫁せられし時の風情烹焼の道具さへ不足に而入り勝の

事は承知あるへしその後互の辛抱に而且々も一軒を立建具敷物臺所道具迄も蟻の餌を拾ふ如くにして集めし事なれば汗の油とも可申也只今に而は一身の存亡すら測り難く家財の損失を懸念するにも不及事なれ共一軒を建居候得は日用道具は無て叶はぬ物故家財之始末も心懸あり度事也まして眼前手廻之調度は互に辛抱の種に候得はさづと心得不申而取扱あるへき事なり

一具足箱に藏置候小具足陣羽織等此亦家傳來の物と申にも無之候得共やはり此方の辛抱溜にて仕調置尙藏書類も澤山には無之候へ共四書五經其外當季之物に事は缺不申様に調置候就中四書并に詩經易經杯は以前骨を折候而讀候故書入も致置候間格別他人に見せ益にも成間敷候得共子供には能々身柄勤學の有様を此にて知せ度候左候は、子供等か物の合點の參候迄はその元にて念を入書書類も紛失不致様に心遣あるへき也

一身柄大逆不道之罪を犯候覺も無御座候は、拜領の品迄御取揚げ可相成儀とも不存候此迄戴候御品は皆く

御上の御垢膩あかに染候吳服にて勿謂ななき物なれば大切に持傳有度事也又家に殘置候御先祖方の筆物并に名高き人の掛書類も龜末に取扱有間敷候此も身柄物數奇に而集候儀にも無之やはり子供中成長の後手蹟を見るも其人となりを思ひ出候得は成立之助りとも成るへし

一親類眷族之交りを始隣里郷黨之契迄心を被用度事に而尤附合杯申候得は物入も有之様被相考候得共格別物を入候而附合を致候にも不及候手前の人柄を能いたし賤敷胡亂の者之仲間に入り不申士之楯を不崩婦徳を不失様心得有ぬへし

元治元年子ノ霜月

もと 太郎

お久とのへ

申のこしひ

述懐

空蟬の命をたふもおしまぬに忍ふもれかハ主しの衛りを
玉とかり砕くること嬉しけれ仇に命を惜しむものりハ
一すしの臣れ道さへ欠かくハ蝦夷り千島も何りいと見ん
さき達し人のあハれを身にそへて身の行末を思ひなるりあ
い終のかみふるの道とてたとり行道こ終我は踐を迷ハす
浮雲の定めなき世をうれたみて袖は時雨ぬ時ありりなり

一七七 山口藩使者口上覺書

元治元年

小倉藩の使者差立候節演説控

申合之覺

殘暑除兼候得共彌御堅固被成御座珍重存候然者方今切迫之砌外夷共之體

勢追々驕傲を相極

神州之御安危も此時と存候御領分之儀は開港場所柄近邊殊更御苦配之段
察入候然處外夷掃攘之儀は兼而
朝廷に被仰出候旨も有之昨年中其御方にも
勅諭御拜受之儀承及候拙者におゐても去夏以來
叡慮遵奉幕議隨順之上夷艦及砲撃に尙此往彌掃攘之
叡念致貫徹候様心配罷居候間此邊之議に就萬端致御相談度因る家來之者
態と差立候委細家來之者の申合候に付御聞取可被下との御事

一七八 時田少輔書翰榊取素彦宛 慶應元年閏五月二日

一翰奉拜呈候爾來彌御勇健可被成御勤奉敬賀候扱過日は遠路に御使節殊
に此節柄別る御苦勞之儀奉存候於小生も不一方御面倒相成渴々遂其節忝
奉存候乍併前後失敬今更恐縮之至平に御海涵奉希上候扱又宰府表に御

拜對相成候土人阪本良馬安藝守衛兩人昨夕馬關表に著仕候段入江和作より届出候間都合能為取扱置申候此方よりも應接之者差出候心得に御座候定而如前約桂君に御面談之積に而渡海致候義と推察仕候勿論御歸山之節も入々御談申上置候儀も御坐候に付不取敢及御知候何卒早々御出關彼之情態御探索有之度所祈候右御報知御一禮旁乍草略相束如此御坐候書外惣而期後鴻恐々謹言

後五月二日

二白 御歸山後御國論如何御決相成候事哉實に切迫之時節早々御一定相成候様乍恐奉希上候此方にも追々及談論申候左様御承知可被成下候乍此上為

國家御盡力吳々奉祈候本文木圭先生も一書差出置候間宜敷御談論可被下候已上

一七九 乃木十郎書翰榊取素彦宛 慶應元年閏五月十一日

猶々時候幾應も御自愛可被成肝要に奉存候乍筆末 御家内様へも宜様被仰上可被下候餘は又以萬々可奉申上候以上
一簡奉呈上候追日向暑相成候處愈 御壯健可被遊御勤仕奉敬賀候將又於爰許小生事も漸全快仕出勤候間乍憚り御安意思召可被下候將又先達は筑州御内用御出之節は何角御厚情被仰聞殊に何寄之御品御惠投被成下難有仕合奉存候其節御咄之一條何廉御配意之儀御禮奉申上候何れにも二男儀快氣次第に其御地に差出申候心得に御座候何分其節は尊公様は平に御引立宜様御頼奉申上候存之通り是迄諸稽古等も致せ不申候間武文稽古等之儀丸に宜様に御頼仕候玉木氏にも今度書狀認め差出申候御歸府之節も一向に不快中故相頼置候へとも四日違拜顔不仕残念次第に奉存候右は先達之御厚禮時候之御見舞旁為可申上如斯御座候恐惶謹言

閏五月十一日

乃木十郎

希次花押

小田村素太郎様

參人々御中

追啓奉申上候此品至る乍輕少寸志積る御挨拶旁奉呈上候大亂筆偏に御仁免可被下候以上

一八〇 廣澤眞臣等書翰「輯取素彦宛」慶應元年六月九日

一筆致啓達候徳山表御著之上早速御談判も有之如何之御様子に候哉備前殿にも引續き御出可相成之處別御用有之旁一應御報知之處御見合に相成り居候事に付彌姦黨共要閉せしめ黠陟等淡路守様思召にも不被爲叶趣に候は、御一左右次第備前殿にも速に御發途且又其御地最寄之諸隊より五六小隊をも被差添越候御都合に有之との御事に付何分之御答被仰越候様

にと存候此段備前殿其外御當役方々可申進様被申附如是御座候恐惶謹言

六月九日

眞花押

前原彦太郎

守花押

中村文右衛門

祇花押

兼重讓藏

山田宇右衛門

頼花押

小田村素太郎様

編者曰本文者廣澤眞臣之筆也

一八一 加藤有隣書翰「松原音藏等宛」慶應元年八月七日

輯取家文書第一 (慶應元年八月)

口上覺

奉略啓候追々御懇接被爲下奉恐謝候然者今日愈御發程御送別旁御禮可能
出處失禮仕候間萬々御仁免奉願上候扱御校密昨日二見一同申上候次第に
る粗愚案披瀝仕候へ共尙又不堪婆心愚直左に申上候宜敷御取捨奉願上候
一藝藩御應接中彼は積月螢心是迄に至り候處彼是御斷りケ間敷杯は却る
激し候姿に至り可申も難計萬一左候共却る御國事苦心の底意を發候に
相違は無御座候間必御震怒無御坐愈御温恭に御真情被爲盡彼自は感服
心酔仕り候様御專要と奉存候兎角昨日入尊覽候秘訣策御妄却無御坐候
様不堪婆心奉存候藝は情藩微力とは乍中幕會薩一等に取リ候は是大邪魔物に相成
居リ候事に御坐候間萬一も和好を不失の義御專要と奉存候
一易傳に知崇禮卑崇效天卑效地天地といへ共一高一下鬼神といへとも一
伸一屈の道理

一備阿等之兩君長と一同情實御説き被成候も實は二見翁等内輪に廻リ長人自
ら藝へ説き候時は彼を辱かしめ候様被取勝に相成り可申姿と奉存候間

隨分御鹽梅を被成候而和同を御主意と被爲候而御説入れ可然奉存候
一水藩の義士を欺殺誅滅致候は防長上下一同極る憤懣罷在候義は諷諭等
の爲め如何程御激議に被爲及候共天下の公論且御自國の事に無御坐候
間御存分に御説き可然奉存候尤藝に亦も大歎息罷在候事に御坐候
一右の外幕罪を責候ケ條は如山候へ共我を其罪を正し候様相當り候而は
我を霸權を立候様に相響き乍恐時處位の三重に相當りかね且彼是の紛
亂に落入り可申奉存候篤と御熟慮可然奉存候
一昨今壬生浪輩千人備前海を筑前へ出帆 條卿等を幕へ引取可申風聞頗
る人心を致感動候風説も有之候へ共左程の不條理は有之間敷萬一有之
候共筑前を初め五諸侯の心得方も可有之此方に亦頓著致候て却て内外
紛擾之基と奉存候乍併昨日申上置候通り藝侯等が公然周旋に亦速に大
赦の令等被行御復京は折角反復御説入れ被爲候方可然奉存候乍併速に
御復職杯はあつがましく御賞罰を指揮致候様に亦は是又朝野の體裁を

取失却不敬の筋にも相當り可申奉存候
 一御大事拙卜の處は天地否の風地觀にて疇離社義黨何れも否を通ぬけ福
 慶に赴き天下萬國刮目して觀望するの象反覆して向ふを見候時は否の
 裡地天泰にて天氣下降し地氣上行するの象尤妙しかし否をはりつめ候
 時は風地觀の反地澤臨にて天上より見下來れは問罪の勅使下來の像 此理を推し
 少しく我よりは屈め大に伸小利小辱を忍びて他日天下の大顯榮に至り候神理御
 熟慮可然奉存候右等全く婆心之痴見乍ら心付候儘亂毫相認奉入御内覽
 候餘は目出度御凱旋之節尙又篤と相伺可申上拙策も御坐候處萬事奉期
 其節候恐惶謹言

仲秋七日

尙々御如才は有御坐間敷候へ共御道中筋の義旁可相成は 御國情矛
 楯無御坐様 徳岩兩卿様方へ之御談合も被爲在候は、別而御都合宜
 敷事と奉存候恐入候へ共立野山田等へ御序之節御内々私共は別而積月

の謝狀も今便は不差出且又藝藩三宅傳君の便りは如何候や伺ひ歸り
 候様傳言の趣被仰聞被下置候は、萬幸奉存候尙又去年馬關の一戰等
 海外新報藝藩へはかな川々相廻り候由に付私共迄御借受被遣候様奉
 願上候山田へ三體詩の諺解後便迄に差出候旨御通し置奉願上候已上
 尙又藝は純乎たる攘夷神典復古大學校何れも同意に候間右御含み
 に而御談判可被成候以上

加藤 巖

松原音藏様

廣澤藤右衛門様

小田村文助様

拜上御機密

一八二 西本清介書翰

〔松原音藏・榊取素彦宛〕慶應元年八月十五日

華墨被成下難有拜見仕候然ハ御國産之鐔被贈下厚ク忝奉存候尤此義者重
役共ニ申聞候上ニ差圖次第拜受可仕先ツ夫レ迄乍失敬御預リ置可申且
御追書ニ被仰聞候趣ニハ明日者御出立被成候旨就ル者御暇乞として罷
出可申筈ニ御座候得とも彼是繁多事に寄り御無音仕候儀も難計其内後會
冀望仕候折角時候御加愛專一に奉存候過刻之貴答旁如此御座候頓首

八月十五日

清 介

音 藏 様

素 太 郎 様

一八三 廣田稼之介書翰

榊取素彦宛

慶應元年八月十八日

秋冷之節益以 御佳祥珍重奉賀候然ハ小生先月板倉ニ申上候通り當月
十一日 尊藩ニ參上仕候處 先生には藝州へ御出之趣ニ不得拜顔遺憾

不少しかし政府之御方様御丁寧に被成下難有奉存候桂先生にも馬關にて
得拜顔候都合によりては來月中旬までに今一度參上可仕存意に御座候二
に御面倒恐入候得共吉田先生の御著書上木出來之分急々御送り被下候様
奉願上候價ハ其節御申越被下候ハ、早速さし上可申上候上關村上君か室
津磯部や半介取次にて下津井魚屋清介にて齋藤義人と御しるし被下候ハ
、直に相届申候將又過日拜借仕候書一卷御歸り之節頓と失念仕今般持參
も亦失念いたし失敬恐入候へ共歸國後急に御返上可仕候也猶書期後便候
也恐惶々々沐再拜

八月十八日夕

廣 田 稼 之 介

小 田 邨 先 生

侍 史

一八四 二見一鷗齋書翰「榊取素彦宛」 慶應元年九月廿八日

華書辱奉拜見候先晩は御厚情被成下難有奉存候扱あつか備三士之儀御返答明日御出張之儀被仰下小生同行委細奉敬諾候先刻御書而被下候節不在只今罷歸奉拜誦候失敬御仁免可被下候明日御發程は何時に相成候哉奉伺候今夕小生推參可奉伺之處乍失敬以書中得御意候御風邪は如何御座候哉御伺申上候何れ明朝御發程前上堂可奉伺候勿々不宣

廿八日夕

二見一鷗齋

拜

小田村先生

執事

一八五 廣田稼之助書翰「榊取素彦宛」 慶應元年九月廿八日

秋冷之節益以御佳勝珍重奉賀候過日始は得拜眉種々失敬多罪々々海涵伏て是祈然は今般齋藤三上輩罷出候義に付少々機密申上度且森寬齋老は被托候義も有之候間急々先生始松原桂兩君に得拜顔度候間山口へ立入相成候様御周旋奉希上候也猶書餘拜眉之上可申上候也恐惶恐惶沐齋再拜

九月廿八日

廣田稼之介

美稻

小田邨先生

侍史

一八六 三上小次郎等書翰「榊取素彦宛」 慶應元年九月廿八日

華墨忝拜見仕候愈御清福奉賀候過日は遠路御苦勞被下忝奉感謝候扱參上之義に付種々御配意被下御書簡之趣一々承知仕候滞留之義は聊御心配被

下間敷候右御答迄可得貴意候勿々不備

九月廿八日

岩藤宗恂
齋藤忠彥
三上小次郎

小田邨素太郎様

梧右

二白 廣田稼之介今日當着仕候銘々同宿仕候間此段御舍置可被下候以上

一八七 三上小次郎等書翰「榊取素彦宛」 慶應元年九月

長州政府小田村君執事備藩三名頓首再拜白 貴藩勤 王事動勞於天下固不待僕等之言也昨貴藩上三大夫之首級以謝闕下暴力動之罪今又以有事不容

易之罪大樹公親將兵屯浪華城以欲召德山侯及與大夫糺事之曲直貴藩辭以病且緩日矣僕等竊爲貴藩不取也何者昨上三大夫之首級以謝 闕下暴力動之罪事已止矣今以他事召貴藩貴藩之人心憎幕府之暴力令有不敢服之議人臣思國者固當然也雖然貴藩若不出則天下之姦人臨時乘隙號違 勅以召列藩之兵列藩之士亦有正姦姦人欲出兵正人禦之遂生爭亂一藩如此則列藩皆然列藩皆然則一時雖極其快何日攘夷以安 宸襟乎是僕等所以深慨於今日也執事請熟察焉若貴藩一應召以解幕府之惑幕府加以之暴力逆則列藩誰敢服聽之列藩不聽則幕府與誰伐貴藩乎姦人欲乘隙不能得也然而正人乘勢以督幕吏之姦速 奏攘夷之功則上安 宸襟下免塗炭豈非千載不拔之大功乎而安其 宸襟與否則在貴藩應召與不應也然則今日天下之安危係貴藩之一舉動執事請諒察焉抑貴藩之忠誠天下已知今日之議實末論也以其末論欲管天下之安危生民受其禍實可悲也是僕等所以流涕爲貴藩不取也三名頓首謹言

乙丑秋九月

一八八 野呂市之進等書翰三上小次郎等宛 慶應元年十月六日

九月廿五日六日比攝海碇泊之異人幕府に申出候るは開港之事難相決直に京都に罷登恐多も

至尊に奉咫尺可申様實に驕傲無禮之次第に付大樹大に怒る阿部豊州松前豆州杯大に叱し置其旨京師に早打を以注進尾州玄同公一橋公速に御下坂被爲在候様との事に付廿八日橋公御乗切に御下坂途中幕より最早御下坂に及不申候由申來候得共推御下坂御登城被遊候處御用無之由豊州豆州差許異人應接等仕居候趣に付橋公憤然として御上京右之件々速 奏問を被爲遂候に付

朝廷大に 御逆鱗被爲遊廿九日兩奸賊官爵被召上就邑深慎罷在追之御沙汰可相待候事被仰出異人應接之事大樹に被仰出候は斷然決戰之心得を

以應接に及自然激水廻候様之事於有之は迷速カに攘夷可致旨被仰出候事右始末に付はは大樹をも急度御譴責可被仰出程之 御逆鱗に御座候得共此段は橋公に御斷被仰上候事右昨五日朝周旋方の途中に御行逢承候事昨五日御

飛脚 今六日朝岡府に野呂氏の報知有之其概略 朝廷に斷然被仰出御國に無遲滯御人數可被差出候事既に兵庫様七日御發之旨被仰出其他追々被仰出候事五日晚七ツ時前山田江見兩君著毫も無疑確報に御座候事榊口與四郎大坂表來狀を以書上げ來る三日將軍歸府豆州伯州豊州蟄居被仰付候事概略前條之通に御座候いつれも山田江見歸國相成候故御出馬事も相成可申候歟と奉察候實に積年之憤怨を洩し候機會到來橋府之御忠實も相顯れ大愉快に御座候

十月六日朝

野呂市之進

海間十郎右衛門

此分三上岩藤齋藤之三士の當て差越候よし
十四日晚山田野村の岩國迄報知

一八九 安達十郎右衛門書翰「輯取素彦宛」 慶應元年十月十四日

芳翰被成下辱奉拜讀候若 尊諭嚴寒之時下御座候處先以 御安泰御奉職
被爲在候段奉敬壽候然は今度御使節にて備前邊の御越御座候に付今宵弊
地御止宿御座候に就るは不奉存寄御懇使被成下殊に吉田先生評註之孫子
御惠贈被下實以御高誼之程深感戴候乍併御冗務中御配慮被爲在候段幾
重にも欣悚之至奉存候何れ登門仕候る御厚禮可申上候得共其内一應之御
請旁奉呈龜毫候草々頓首

十月十四日

二陳 過剋は出勤中にて御請も不申上大に御曠禮仕候今晚も早速拜謁
も可仕筈に御座候へ共も早及深更候故御無音仕候幾回にも御懇篤之至

奉感荷候萬縷拜青之節と申上縮候以上頓首

安達十郎右衛門拜

小田村素太郎様

侍史下御請

一九〇 上山縫殿書翰「輯取素彦宛」 慶應元年十一月五日

過朔日御書狀今日相達忝奉拜誦候先以
君上御機嫌克恐悦至極御同情に奉存候將又老臺愈御安寧今以藝城御滞在
之由御苦心御配慮と奉想像候其他少々は情態解得正誠貫通仕候哉と奉存
候當境確守之義は更に御掛念被成間敷候扱又備藩書牘即差上申候御落掌
可被下候時下逐日寒威甚烈貴體御愛養爲國家是禱候右拜答而已當直中草
略申上存候恐惶謹白

十一月五日

御幾重も御自重奉祈候御留守御安穩更に御案被成間敷候弊舍も皆々無事消光仕候御加筆被成下忝早速可申聞難有かり候半と奉存候以上

素太郎様

侍史拜答

一九一 楫取素彦書翰〔廣澤眞臣宛〕 慶應元年十一月六日

御歸山之由萩地御滞在中嘸々御苦勞に奉存候藝城幕議も追々御聞及も可被成弟儀も御一同議置候罷歸り度只今政事堂可罷出被仰越候處全體藝城より風を引居候全快不仕候處昨夜より發熱頭痛甚敷今朝より伏枕難儀仕候折角昨夜飛脚到來に付木梨氏進退議も早々御決定御報可被仰越旁御合議仕度候得共不任心底に乍失敬今日にても御下りに一寸御立寄被下間敷哉彼此御伺も仕置度不少幾重も只今尊局罷登り兼候儀御一紗中の

宜奉希候以上

六日

昨日飛脚御用狀も一寸拜見仕度候以上

小田村素太郎

廣澤藤右衛門様

急き

一九二 廣澤眞臣書翰〔楫取素彦宛〕 慶應元年十一月六日

奉謹讀候折角昨日は御出被下難有奉萬謝候駈違御留守に罷出終に拜顔不得仕奉殘懷候扱昨夜藝城の飛脚到着別番御用狀相見へ其儘差出候間御熟覽可被下候就るは木梨侍御史進退議は肉大夫氣附之通政府一紗同意に一應引取可然哉との御評決相成候孰れ決局幕令相下候節は詰り肉大夫壹人にも相濟候様有之度然すれば今日之費用と申往先き決戰必然に付壹

人にも人数多き方宜敷事に付幸速に引取上策歟にと之御論決に御座候
尤御氣附筋も御座候は、何分被仰聞度奉存候木梨も様子次第に來る十
日比出足歸國之合にも有之由に付前件之通御同意候は、飛脚之者今晚
差歸合御座候何分又々御答奉待候以上

則

尚々下宿掛必々登堂可仕其中御氣分御加護奉專禱候頓首

廣澤藤右衛門

小田村素太郎様

一九三 尖戸璣書翰〔赤川又太郎宛〕 慶應元年十一月九日

拜披仕候先日小田村も鳥渡歸國いつれ近々可罷越且〔備助也〕小生杯も持病腕に無
之旁御見合被下たく尤其中尊兄〔晚翁也〕御病平快に候は、小田村等不罷歸とも御
乞合可致候段被仰越置候はいか、植寺等罷越候は、尊兄此節腹痛時

々差起糞行不時に付初對面にて失敬相成候もいかと御答被成置候方
可然哉餘り此方あぶし付候様無之候よろしかるべしと奉存候然る彼渴
望後來る方我説も入り易かるべき歟御尊案奉希候

初九

六々生

土火翁様

拜復

一九四 尖戸璣書翰〔榊取素彦宛〕 慶應元年十一月九日

奉拜讀候被仰越候趣千萬御尤に奉存候小生も可申越候間貴兄も被仰
越候はいか、可相成は河瀬杯如きものに候へはよろしく候へとも此は
多分六ヶ敷事に可有之いつれ一旦境上迄引取候る根據を占め候哉又は船
住居等にて罷在候へは破裂迄は彼仁等か或は廣藤杯にもよろしく候へ

共廣澤は決して手は被引間敷隊中人も何卒條理之勘辨能々有之人に無之候もは却も困り候氣味も可有之哉旁御案し置可被下候爲御答如此に御座候頓首

初九

肉生

小田村様

拜復

一九五 廣田稼之助書翰〔楳取素彦宛〕 慶應元年十一月十五日

益御佳勝珍重奉賀候今般幕の軍監廣島まで出張何歟尊藩へ應接の事ありと云且奇兵隊始諸隊を呼との風説も御座候へ共決も御出なきを妙と奉存候備前決も人數を出し不申國論なり何歟委曲申上度候へ共三上生路を急き候間書外近日期拜顔可申上候也恐惶沐再拜

霜十五日

廣田稼之介

小田邨先生

侍史

一九六 植田乙次郎等書翰〔楳取素彦宛〕 慶應元年十一月廿三日

貴墨拜讀仕候如仰向寒之節御座候處愈御安清御奉職可被成と奉萬賀候然も今般益田伊勢兩氏弊邑御越被成候旨被仰聞趣承知仕遙に御苦勞之御義に奉存候御一同御到著乙次郎儀早速御面會仕如舊識御懇意被成下別も大慶奉存候尤生十郎儀は故障之義御座候も終に御滞留中御伺も不致甚失敬仕候將又此度は何寄之品御惠贈被成下御厚意辱相納仕候しかし毎度御心遣ひに相成り何共恐疎之至奉存候猶期拜顔可奉萬謝と一應之御請答迄申上度随分時下御自愛奉專禱候勿々不宣

十一月廿三日

西本清介
寺尾生十郎
久保田平司
植田乙次郎

小田村素太郎様

一九七 西本清介久保田平司書翰

榊取素彦宛

慶應元年十一月廿三日

尙々宍戸君へは呈書不仕候間萬々宜御鶴聲可被下奉願候

芳墨被投不取敢忝奉拜閱候如貴諭屢寒冷相加候處倍御清適被爲成御座候
條奉大賀候然者今般益田伊勢兩君爲御使者御越被成御苦勞之御儀奉存候
不相替御懇命相蒙本懐之至奉存候乍併萬不都東に於始終失敬而已相働今
更恐縮仕候可然御斷被置可被下候様奉願候陳先般之御挨拶と御座候宍

戸君貴兄が不存寄結構之御品頂戴被 仰付難有拜受仕幾久敷重寶可仕奉
多謝候乍併彼是御配意被成下候段却痛之至奉存候今般何ぞ御答禮可申上
等之處折柄取紛中其儀不能何れ不遠拜謝可仕候得とも先は一應之御請答
迄如此御座候恐々敬白

十一月廿三日

久保田平司
西本清介

小田村素太郎様

侍史

再伸 時下隨分御厭可被成奉祈候將又由良謙介へ迄結構之御品御惠贈
被成下難有仕合奉存候從同人は此度者御無音仕候間私共が宜御禮申上
吳候様申出仕候

一近藤大人之短尺平司に御惠贈被成下兼る相好居候義に於別る御厚情之

至難盡奉深謝候

一此度印鑑之儀は伊勢君へ委細申上置候間御承知被成下宜奉願候右之條々得貴意度乍末憚
皆様に可然御鶴聲可被下萬々後音と申殘し候不備

一九八 西本清介植田乙次郎等書翰〔楳取素彦宛〕慶應元年十一月廿三日

（封表）
小田素太郎様

侍史

西本清介

久保田平司

植田乙次郎

寺尾生十郎

昨夜も拜趨不相替大頂戴甚失敬而已立働多罪御海涵之程偏奉希候將歸宿後隊中之御仁御出被下拜話も可仕處宿主頻御連歸申從是社何分失禮之次第御座候處却る縷々御懇贖之趣恐縮之外無之右に付御隊法に御取行杯不

存寄仕合迷惑至極仕候何卒右邊之御沙汰者御用捨被成下候様只管奉懇願度林君にも可然御鶴聲奉憚候且昨夜之御禮も申上度は是等之義も御一席諸彦に宜御挨拶申上度乍大略昨宵之奉請旁書餘拜謁之上と申上殘候頓首

廿三日

乙次郎

清介

素太郎様

辭御書答

一九九 寺尾生十郎書翰〔楳取素彦宛〕慶應元年十一月廿五日

今朝は尊書被成下拜誦仕候此度御用向爲在又々御來賁之由毎々御苦身之儀奉存候然は備前藩へ御相對被成度段被仰越承知仕候昨夜一郎義應接仕候處今日は發足罷歸候趣に付尙一郎を相尋せ候處出立用意中には御座候

へ共早刻罷出拜眉可仕趣申越候間右様御承知可被成下候右等歩ひも有之御答及延引申候勿々頓首

十一月廿五日

寺尾生十郎

小田村素太郎様

拜復

二〇〇 楫取素彦書翰〔藩周旋方宛〕 慶應元年十一月廿六日

尊書拜見仕候然者備前藩へ罷越候儀同藩新庄作左衛門申分甚難澁之趣に相聞へ候儀御合被下平昔之誼御懇切別々難有奉存候右は何ぞ行違之趣有之事歟も難相測即ち同方駈合振待居可申候 貴藩御關係なき事とは乍申御手数被成下候段幾重も難有奉存候他は拜晤萬謝可申述候頓首

十一月廿六日

二〇一 植田乙次郎寺尾生十郎書翰〔楫取素彦宛〕

慶應元年十一月廿六日

(封表)
素太郎様

乙次郎
生十郎

啓呈仕候然者備前表へ御發行之儀に付前時乙次郎が及懸合候儀は嘸御承知被下候儀と奉存候然處生十郎儀作右衛門へ面會承り候處に何分此場合同方へ御出之儀は殊之外先方難澁之容子に弊藩の心事申上御差留申吳候様にとの儀に御座候素々此方に關係は無之候へとも斯表向相聞候處に何は甚駈引六ヶ敷相成申候間旁以此鼻押に御出被成候は却る貴藩之御爲にも不相成儀と申值候間先つ御止り被成候方可然と奉存候儀に御座候書外委曲は拜鳳之上御嘶可申上と右之趣迄承度得貴意度勿々頓首

十一月廿六日

二〇二 植田乙次郎書翰〔榊取素彦宛〕 慶應元年十一月廿六日

素太郎様

玉几下拜呈

乙次郎

拜啓仕候昨日者寛々得拜話大慶奉存候然ほ早々御發足備前へ御出之趣同藩新庄作右衛門承り何そ手違之義より歎同方へ御出之義は殊に難溢之趣に申聞候素々弊藩に關係は無之義いつれ同方及御駈合候義と奉存候へ共御含迄に得貴意候間右様御承知被置可被下候勿々頓首

十一月廿六日

二〇三 久保田平司書翰〔榊取素彦宛〕 慶應元年十二月七日

一翰呈上仕候嚴寒御座候處倍御清適可被爲在奉敬賀候就ほ今般道家牧太岡田嘉治馬爲使者罷出候所不相變御厄害に罷成可申萬端可然奉希候將亦別紙之通滯居候旨相聞候所相違も無御座候は、乍御手數御取調速に渡り合候様奉願候先右要旨取束御頼爲可得貴意如是御座候恐々不宣

久保田平司拜

臘月七日

小田村素太郎様

呈玉机下

再伸 年内餘日も無御座節角御保護可被成奉祈候乍憚伊勢君始各位方は可然御傳聲之程奉頼候此粗丹甚以如何敷御座候へ共近藤大人は獻呈仕度御序に御届可被下是又宜奉冀候再拜

二〇四 深町三郎左衛門書翰〔榊取素彦宛〕 慶應元年十二月廿三日

榊取家文書第一 (慶應元年十二月)

三百二十七

今朝は御來賁被下難有奉存候扱其刻御噂申上置候別封兩通へ貳箱相添爲
持差出し候間夫々御收手可被成下候右要旨迄申上度草々頓首拜

極月廿三日

深町三郎左衛門

小田邨素太郎様

侍史下

二〇五 尖戸璣書翰「榊取素彦宛」慶應二年二月二日

好便に付思出候儘申上候割小松等活板之儀何卒早々出来いたし御國中
流布爲致置度事に御座候先日見込之通屹と國內へは間諜入込居候事に付
右等之示し候ためにも相成候間何卒被仰合御周旋被成置候様にと奉存候
黒良も去月廿九日爰元發船品川生同道罷越候彼も至極深切に盡力之覺悟
之よし色々心積りを相話居候御歸り之上何も細話可仕候岩にて去月彦

使應接書爰元へも差越一覽いたし候多分鴻城へも差出し候事と奉存候御
歸山後嘸々御配慮と奉察候何も御疎無之候へとも行届候様御談合有之候
而御歸り被成候様奉待候彦使口頭にて土肥家老呼出之主意も能く相分り
候へとも彼輩我國情未た貫徹不致故割松等活刷も別々差急き候事と奉存
候儀御座候糞之割松付と之策は既に今日行ひ置事に御座候先は此のみ如
此御座候頓首

二月二日

退一生

晩稼先輩

侍史

尙々千萬御面倒奉恐入候へとも御歸り之節於鴻城あざ五郎福羽口口の通
様之通り同一着丈け御買得被成下御取歸り奉希候山口諸彦へもよろしく
奉願候已上

二〇六 尖戸璣書翰〔楫取素彦宛〕 慶應二年二月十二日

拜讀仕候今日御來臨御斷相成候由との事いかにも御風氣御迷惑には可被
爲在候へとも今日之議は是非とも御來會不被成下候亦は不相濟本支合體
國家至重事件に付例之御厚装にて御來臨被下候へは今日は格別寒さも少
く候まゝいか様とも御病御つとめ御出可被下候爲其又々申上候頓首

十二日

本文不可輕々讀過一字一思一句一慮匪尋常言也

南隣

北隣様

拜復待回答

側役

田中三郎左衛門

留守居

日下部内記

田部金藏

廿四日來る廿五日湊にて應接廿六日引取り

目加田喜助

長新兵衛

吉川勇作記

今田靱負

二〇七 楫取素彦書翰〔赤川又太郎宛〕 慶應二年二月廿八日

拜別後如何御度り被成候哉弟儀昨廿七日五ツ時乘船今曉新湊に到着道路黃
菜翠麥歷々如織久振りに廣き野原に脱樊之鳥之如く屢膈膊に飛行を
擅仕候御一笑奉希候朝飯後岩國の行長新兵衛用人罷出相對姦全等應接之
始末を尋候處廿四日突然と小瀬口の罷越關戸に引受候亦は關門内に延候

様に成候故又々新湊に差廻し岩には本道使節と考候故逆旅も仕向け置候
得共槍を壹本も爲持不申故如何哉と尋候處彼等曰出張場より當無首公内
命を承り罷越表立候は目立候に付々様忍にて罷越し岩にて内使と申儀
尤嫌疑の氣遣有之何事も表向の引受に致し別紙に人員湊迄出浮相對候處
姦全等曰無首公心入を以密命被申合に故是岩公の謁し命を通し度云々岩
人曰主人當節謹慎中一向に他人面會は不仕不肖之面々には候得共主人爲
名代某等被差出候事故御密命と申儀被仰聞候は、早々主人に可申聞候云
々姦等無據其意に隨ひ候由右言分に彌御聞及は被成候歟御宗家御處置廢
削之件云々孰れ不日發令に到り可申御當家は格別之御契も有之候故右御
發令に不相成已前一寸御内通致し置との主意に因り某等被差越候云々岩
人曰誠に御心入忝存候然は早速主人監物に可申聞候然る上に何分之勘辨
も有之候は、御返答に可申述候云々翌日に至り姦全等に對曰昨日被仰聞
候儀主人に申聞せ候處只管仰天に到り實は本家父子恭順謹慎之状態は見

るに不忍聞にも不忍次第折角去年以來藝州を介し御寛大之儀を歎置候次
第も有之其後三監察に申演候儀も餘事には無之只此邊を而已悲歎泣血仕
候事に候處右様不思寄被仰達には只々仰天當惑計り何も勘辨と申儀は
絶て無之勘辨と云々且つ伏罪之末家中迄廣島迄御呼出と
申儀如何之御次第に候哉此儀に付は如何御受仕候可宜哉只々當惑十
方に暮候由を以て相答へ姦一等は何か宜敷周旋を頼候とか取持吳とか挨
拶は必然と竊に期し候處岩の口上意外に出却て當惑仕り候姦一等一言も
無之口をつふし居候由暫くして姦一等曰何歟御勘辨ともは無之哉岩人曰
最前御答申上候通何に勘辨處にては無之云々到底扱を頼とも周旋を乞と
も又は意外の暴斷とも惣取留に成り候儀は一言も不申出候相屏け候
様至極能都合之應接と奉存候右之次第早速書取に相認め山口と御地に送
候積りにて廿六日から今日迄編輯に懸り候由多分今晚は鹽鼎迄報知可有
之候何も右書中就御承知可被下候此書は大略を記し一寸御報告仕候兩

大夫にも宜敷奉希候勿々頓首

二月念八日午

素太郎

尙々只今長新引取人足を爲待候も相認亂筆御免可被下候書中は忽略眞
の大意計り申上候

佐氏品彌にも宜敷御傳聲奉希候留守中何も御世話と奉存候已上

又太郎様

侍史

二〇八 矢戸璣書翰榊取素彦宛 慶應二年三月三日

爰元御發足後岩々之御書狀拜見其後多分御滯無之朔日頃には御歸着と奉
察候先以

公台益御機嫌克御坐被遊恐悅至極に奉存候尙御國內いづれも嚴肅候半と

奉存候間例之所能々御氣を被付候様申も疎に奉存候昨日大和や政助鳥渡
立寄候に付赤川氏姓名として小生々鳥渡私書差出置候其後此儀申上候御
用狀之趣有之い細は赤川氏并に小生等々政事堂へ差出候書狀にて御覽可
被下候故に只此書狀は私事のみ申上候

御歸着後嘸かし御配慮と奉存候何卒御盡力申上も疎に候奉存候御序廣澤
松原大津翁杯へよろしく奉願候大津翁へ贈物は嘸御厄害と奉存候

此地木翁之御用狀にて御承知被下進退之儀凡木翁氣付も有之政府迄申
遣候間尊兄には爰元之模様等も篤と御承知にも有之旁政府にて巨細被仰
入候御評決奉願上候

木翁一旦引取に相成候もは再出いかと申説も可有之候へとも幕におゐ
ていか可申哉は不相分候へとも木翁意内にては様子次第屹と再出はい
たし候事に付此際は一應引取置候方にいたし度との事に御座候御玩味可
被下候此また一策哉とも被存候事に御座候

木翁決意に有は急速報答無之候へは十日頃には是非爰元發足いたすとの事に候間左候へは木寓其外賄方等迄迷惑不相成様にいたし度寓寺にても御承知之通疊其外餘分之破損且去冬已來は於寺方も野菜料香奠上りものも無之日々暮し方之貧富にも關係いたし候旁い細御承知之趣御仕向相成不申有は節角大夫と號し罷越居候面體にも關係可致哉此も乍序申上置候付御考慮可被下候

木翁は只今迄別段百金程宛御仕向を被受候様申事に候間御承知之通此節之譯に有は六ヶ敷次第も有之候故小生も可相成は木翁之例を以別段用金御仕向相願度候間此も御周旋被下たく奉願候先日御尊も有之此兵衛へ被仰聞も有之儀に候へとも於小生は已に人別渡方もいたし不申有は彼輩に有も六ヶ敷に付夫々相渡し候事にて左候へは上下ともに一様之御仕なしに有は實に〳〵通りかたきは御承知之前に付木翁之通り相願候も無理に有之間敷御推知奉希上候也○萬々御配意相願奉恐入候へとも梅坪か又

は百城又は別人に有もよろしく凡 圖位之印材へ三菴と申二字御刻させ被下ましく哉御用多に有御六ヶ敷候へは是非とは難申候へとも御序も候は、何卒奉希上候三は巽卦に有御座候即ち六字菴字書にて論し候へはにも相成候事にて面白しと案し出し申候先日申上候盡之巽へ出候事に御座候

國重も出山いたし候哉御序よろしく奉希上候
大和や政に托し之書中に申上候件々もよろしく奉願候先は爲其のみ草々
閣筆頓首

重三

備後助

璣花押

尙々爲國家御自愛申も疎御座候

素太郎様

侍史下

二〇九 國重正文書翰「楳取素彦宛」 慶應二年三月四日

朶雲拜披仕候彌御忠壯此間は御歸山被爲作候由寒暄不同之候遠途御奔勞御苦胸被爲在候段實以奉恭察候滯藝 諸先輩健在之近情粗金作も傳承忠慨壯烈實不堪欽仰候陳應接も徐に端を開候意か如諭もはや理盡義到之場に候得は奮興決戰臣子之分を盡の外手段無之候全體士氣も稍方向を知十に八九は敵愾之勢有之様相見候今日に當り苟安賣國之謀を爲ものは死骨饑犬の不食極醜々々併是等の人は有之間敷何も僕贅言に不及定て近情可被聞召候付閣筆

陳梅坪生即刻之儀被仰下承知追々催促は無疎候得とも何分嬾生に候處餘手間取申候この壹顆昨夜取歸申候何分乍御面倒御送致奉頼候外に蠟石壹貳顆に關防印は昨夕迄に調候約定に御座候其節 先生被仰付候讀書云々の關防印も出來可申付後郵に託可申候陳私も例の難脚とうも全快不仕

彼は六十日餘臥辱漸昨日初て外出今日登局餘程困却仕候折角御滯山之事候得は得拜顔緩々拜話仕度奉存候得共今に醫師之手はなれ不申來る十四五日頃には是非出山之積候得とも其頃は御發軔可相成何とも残念奉存候如諭春花爛漫之候勿々打過殊に今日赤川佐伯氏盛に藝州之事を傳ふ實に魂神飛趣之概有之申候委細金作口頭に付縷々可申上候間御聞取可被下候田翁其外御傳言之趣承知仕候其内時候御珍衛專一奉存候餘は後鴻頓首拜復

三月四日夜

徳次郎

耕堂老丈

文机左空

(封表)

小田邨素太郎様

國重徳次郎

楳取家文書第一 (慶應二年三月)

三百三十九

急啓内容

二一〇 柏村信書翰〔楳取素彦宛〕 慶應二年三月六日

御答書奉拜見候少々御頭痛之氣味に御加養被成候由乍此上御自重申上も痴に奉存候陳者御相談は申も餘之義無之昨晚從藝急飛罷歸り趣は御出足前同役彦右衛門爲何達しも無之に付御聞繕演說被差出置候處右書面の當り格別御用向無之勝手に引取候様との事に付甚失望に御座候來る十日比に出足歸國之積りに申越候右之趣相伺候處引取候との事ならば早々歸國可然思召に付政府中へも及示談候處 思食通に宜敷此末備後助壹人にも相濟候様申出萬一壹人にも不相濟との事に候へは自判書も差出置候義に付重彦右衛門出藝被仰付候可然無用之ものならば半人にも不被差置方第一失費にも相拘り引取被仰付度事と決議に相成候右に付御尊慮共は無之哉相伺度心得に申上候事に御座候明朝迄には飛脚差返し候

間御狀共被差出候は、私方迄御持せ可被遣候此度打廻之者罷歸り直様返答爲持候て歸せ候合に御座候勿々頓首

三月六日

數馬

素太郎様

御直拆

二一一 鹽谷鼎助書翰〔赤川又太郎宛〕 慶應二年三月八日

赤川様

鹽谷鼎助

貴酬

如仰濛雨鬱々敷御座候處彌 御清適奉賀候然る小生儀昨日來少々腹痛且持病之痔疾も差起り彼是にて所詮御無沙汰而已申上奉恐入候御海容奉祈上候陳るは彦藩人又候敝邑に參候哉之段被仰聞承知仕候然に在所よりは

勿論何たる事も不申來彦藩は尙更何之沙汰も無御座候次第に御座候乍
去案外小生へは無沙汰にて罷越候哉も難計と存候何れ今明日之内には飛
脚罷歸候心當も御座候間様子相分り次第罷出可奉申上候先は御答迄草々
如此に御座候餘は拜 青之節と申縮候頓首再拜

八日

二二二 赤川又太郎書翰榊取素彦宛 慶應二年三月十日

五郎十歳急遞歸着縷々拜讀候歸國力疾御盡力之段奉承知候臚膊歸飛所謂
星歌此地違々自ら作詩識候事歟と依例如鷹生一同哄笑候事にて御坐候姦
全等再應崑國の罷出候説も有之候得とも鹽鼎なども未承知事に御坐候土
肥家老出揃申候由に御坐候糞翁其外割松も近々傳播藝兩君公も一覽に
入れ候由に御坐候備前にも新作杯寫取歸り候由に糞承及申候先書御厄
害之廉申上候處御病中旁嘸々御苦勞之御儀と奉遙察候出先平穩如高諭萬

御決議之上御歸寓所希御坐候姦宮等布告文木梨要介取歸申候一匹夫天下
之事を論し堂々紀彦など鼓動いたし候事不堪切齒候宮六は此節上坂夫々
九州に下り諸藩を説得し征長之兵を出すとの事不堪一笑候此等之事は幕
吏も一笑致候由植醉入來に申談候事に御坐候い曲は政事堂諸彦の申越
尙木大夫口頭にて御承知可被下候右爲得貴意候草々如此御坐候恐惶謹言
三月十日曉

又 太郎

嘯花押

素 太 郎 様

二二三 赤川又太郎書翰赤川又太郎宛 慶應二年三月十二日

拜披昨夜は船降不來御俟ほけ之よし何其不來必有以矣扱また鹽鼎はいよ
明日發足歸邑候哉其後御逢哉と奉存候萬一今日弊寓の罷越候は、可

申上候に付御來臨可被下候昨日植乙寺生之中鹽鼎に罷越候哉略々御聞せ奉待候頓首

十二

再白 君道木齊來於巽我疑羽客再歸來名號十八雖然但耻乏神通秘術才御一笑可有候嘻々閣筆

十 八拜

二四王先輩

拜復

二一四 尖戸璣書翰〔赤川又太郎宛〕 慶應二年三月十二日

爾後雨起いかゞ御起居被成候哉糞翁が割小松かへり候半鳥渡拜借仕度候いつれ今日は鹽鼎氏を罷越候様との事に付彼方にて拜晤可仕候へとも其中貴答拜俟候頓首

十二日

木翁歸途雨多嘸々被困候半と想像いたし候カ事に御座候

巽 生

晚 翠 盟 契

拜呈

二一五 佐伯愿藏書翰〔赤川又太郎宛〕 慶應二年三月十二日

赤川先生

佐伯愿藏

侍史尊報

尙々歸邑之儀いつれ罷出御差圖を可奉請候得共先つは内治定之儀申上置候頓首

尊書被成下難有奉拜誦候益御清穆可被在御座と奉恭賀候然は昨日拜借被

仰付候冊物寫取未た半途之事に御座候得共一先御返納仕候間御落掌被成
下候様奉願上候猶寺尾生十郎唯今罷越し相對仕候内に御座候歸邑之儀は
先づ明日明後日間當寓出立可仕内存に御座候先は御請爲可申上如斯に御
座候頓首謹言

三月十二日

再陳 尊報罷出可申上筈に御座候得共客來中に奉得尊慮候段失敬多罪
曲る御海容可被成下候様偏に奉希上候拜白

二一六 宍戸璣書翰〔楫取素彦宛〕 慶應二年三月廿二日

奉拜披候夏もの取寄之儀被仰聞奉承知候小生分は紋所有之分は何も用に
相立不申且御承知之通彼是候付るは先日御紋もの等は申遣し置候いつれ
下之もの一人差返之覺悟にも有之候有平已下之分は先日も此段は申聞せ
置候に付此儀は疾々内々用意仕置候事に御座候尤遠路彼是に付るはいつ

れ方も苦慮歎出之儀も有之故小生苦心罷在候いつれ並々之外別段御厄害
は不申出覺悟に付左様御安慮可被下候
萬代小銃之儀承知仕候後刻此より持せ可差出候付左様御思召可被下候頓
首

廿二日

南 房

北 院 様

拜復

二一七 楫取素彦赤川又太郎書翰〔藝藩宛〕 慶應二年四月四日

此分不差出候事

私共宍戸備後助一同御用相濟候間御當地引拂歸國可仕之旨被 仰達候に
付明五日出足仕候間此段致御届候宜御取計被成下度致御頼候以上

四月四日

小田村素太郎
赤川又太郎

二一八 西本清介・植田乙次郎書翰

〔榊取素彦宛〕 慶應二年四月廿三日

貴墨拜披御書中之趣承知仕彼是御苦勞相備恐縮之至奉存候何も明朝拜眉可申上眞之御答迄如是御座候頓首

廿三日

尙々只今今田氏相見へ小酌醉筆飛羽御高恕可被下候以上

西本
植田拜

小田村様

御答

二一九 長藩士某覺書

慶應二年五月頃

一 山口御本陣應接は強而根強く威武を十分に示し中堅は情弱と侮り候様之儀無之段肝要に存候事

一 柴田應接書野島等戦を促す書面一見致させ度候事

一 近江守殿領分引取之事

一 先鋒は不同意なれ共 主人之深旨有之に依て云々

一 奇印に恩を賣り中軍に秘す云々之儀も有之候間其御含を以十分に申解

也

君公寛大之御深旨を飽迄貫き御美德を示し度候事

一 府印之御使番之事

一 隊長引受之儀は随分鄭重にして番長御使者之事

一 連署書面は將來の國論を定め違却に不及様御取締置之事

一 最初の度々之遷延を趣きに寄り取締之事
別に

一望東女史扶持之事

先鋒應接之主意

彼

窮迫に不堪國を擧げて遁る之外手段なし

我

弱を凌ぎ強を畏るゝは武士之所恥假令十萬之強敵たり共敢て不畏隨分戰鬪に可及候得共國を擧て去るとは實に御困迫之情狀見るに忍ひす候間立除き之儀は暫く見合候様各共山口に罷越 主人に可相伺との儀に御座候右之返答山口を申越候寛大之御主意丈けは馬關におゐて應接に及ひ直様小郡に可差越心得

一 壹岐守の罪を譲り自分は能き顔をするが小倉を僻せに候間此時柴田其

外之書を出す

一 吉田清左衛門を送る照顔録七八部山河襟帶之詩烟柳蕭疎之詩四五枚宛
早々御周旋奉頼候事

二二〇 大草終吉等書翰「榊取素彦宛」慶應二年六月廿五日

貴翰拜見仕候甚暑之節愈御壯健被成御座奉恐賀候然は備後助様過廿一日關老伯州公御旅館被召出御國情之次第被仰上翌廿二日又々備後助様先生御兩人被召寄御陳述被爲成御底意無遺漏被聞召御不審之趣も御氷釋に相成御國許可被召返との御事に於藝藩政府衆之中被相伴此元新湊迄可被罷越手筈に相成候付新湊御着船之砌砲撃等不仕様猶又御乘馬仕構等之儀縷々被仰下候趣委細承知仕候右貴答迄草々如此御座候以上

大草終吉

鹽谷鼎助

六月廿五日

目加田喜助

猶以御政府之御方の御壹封御差越被成慥に落手仕候此節高森御滞在之御方も無御座候付急飛を以山口表差上候様可仕候以上

小田村素太郎様

二二一 梶原治人等書翰 [梶取素彦宛] 慶應二年六月廿九日

(封表)

小田村素太郎様

貴酬御直拆

林良輔
梶原治人

貴翰拜讀如尊諭酷暑難凌御座候處彌御堅剛被爲陟奉慶賀候然此度肉大
夫始尊臺御幽囚御許海上無御滯過る廿六日夕刻新港の御著岸被成候由誠
に爲國家奉欣躍候右に付來る二日三日頃御歸山之御都合に付御著掛け御

出殿被成度御紙面之趣承知仕候格別

御前向御差添可被爲在に付右様御承知被下大夫にも被仰達被下候様奉願
候尙又藝藩植田立野兩子御同伴之由右引請振之儀政府申談見候處當節柄
關門内は先は陣屋同様之心得に而是迄之手都合に而引請も相成苦敷に付
於宮市應接仕候筋に一決仕委細政府より御答可申上候間其趣を以程克御
取計相成候様奉存候書餘不日拜鳳萬縷可申上御請のみ申上縷々勿々頓首
六月廿九日

治人

幹花押

數馬

安致花押

在關に付無判

孫七郎

三百五十三

尙々其内時下御自重奉祈候彦右衛門事相原治人と改被仰付候付右様御承知可被下候以上

素 太 郎 様

侍史

二二三 植田乙次郎立野一郎書翰〔楳取素彦宛〕 慶應二年七月二日

（封表）

小田村素太郎様

植田乙次郎

立野 一 郎

侍史

露封御高免且不煩尊答

炎暑中御旅行嘸々御草臥奉察知候過刻は久留君御出被下廣澤君初御出浮

之義も拜承仕候いづれ今晚は宍戸様御相對御座候義と奉存候小子輩も先刻方御厚待に預り追々深更にも及可申に付態と著扣相伺不申宍戸様も乍憚萬々御取繕被仰上可被下候付差力は廣澤君御初へ御相對之義も明朝之義に被成下候様仕度奉存候其内今晚之方御都合事にも被爲在候へは素方尊寓へ相伺可申不取敢御見廻旁一書拜呈仕候勿々頓首

七月二日

二二三 宍戸璣書翰〔楳取素彦宛〕 慶應二年七月七日

昨夕は罷出御饗待奉謝候藝々書狀之儀幾重にも廣澤其外御申合相願候尙また小生いづれ盆前後には罷出可申候へとも其中諸口戦争之様子御聞及被成次第御用狀包にして急に萩政事堂御用狀便被差越可被下奉希上候此儀別々相願候間必々事々御報知奉待候頓首

七 夕

小田 郵 様

拜呈

二二四 宍戸 璣書翰

榊取素彦・赤川又太郎宛 慶應二年七月十日

其後彌御清壯御起居被成候半と奉賀候扱藝の御遣し書面政府局中にて御氣付之件々御尤に奉存候間御添削之通可然と於小生相考候に付右様御承知可被下候尙また小田村兄の御書中にて相伺候へは寺尾生十郎の岩人の當候書狀に小生等歸著之上は越境之兵士境上迄爲引取候様之約定いたし候様に御認有之よし何とも驚入たる申分と奉存候右は先日も申上置候通宮津閣老の幕府にて御解兵被成候様にと申候處閣老申分に其方兵士越境候へは右を申立此方兵士も不相退に付身柄獨案にも相成兼候に付其方兵士境上を爲引取候様には不相成哉と被申事に付何分私とも幽囚後之國情

は委細承知不仕候へとも右越境之様子を以相考候へは兼々士民一統此度御討入之主意は

天朝幕府眞之御思召とは不奉考に付只々寇を相防候心得に可能在左候へは戸口の押入しをば戸口に相防可申候へとも未だ門外に罷在不立去候へは門外をも追拂候は人情之常に候へは中々國元之ものにも於幕府御解兵無之候は容易には引取申間敷と申置候のみにて別段彌爲引取候との約條決して無之何と書面にて相認置候様之儀有之候へは寺生右様申遣候事も尤に候へとも何も幽囚後國情承知可致様も無之只々藝人の對し候は申置候にはいかにも御境内に入込居候は難堪次第に候へとも舊年來も申述候通かゝる形勢に相成候へは右様相成候は必然之事に相重て只今之形勢に立至り不申様にと種々心配も仕候へとも只今に立至り候は何ともいたし方無之尤別段藝州様へ御恨み有之には無之御隣交之儀何も不相替儀に候へとも敵兵といたし候もの御境内に侵入故只々

小瀬川中央に相防候譯には難相成不得止勢に可有之此儀は幾重にも御推恕相願候尤御國內農商迷惑不相成様には精々心配可爲致と申置候のみに御座候間此所を以御返詞被爲在候よろしく候尙また植田乙次郎儀は兩度とも小生一同閣老に罷出候ものに候へとも先日於宮市右様之申分はいたし申間敷此處にても右等約定かましき事無之段は御推知可被下候先は御答旁如此御座候頓首

十日

備後助

尙々小生早速歸山可仕覺悟に候へとも少々不快にも有之其中差急き療

養出山可仕候間右様被思召置可被下候

山田廣澤其外諸君へも不惡御致意奉希上候先は爲其如此候以上

藝之書狀其儘返壁候間御落手可被下候以上

小田村先生

赤川先生

二二五 西本清介植田乙次郎書翰

廣澤真臣
榊取素彦宛

慶應二年七月廿日

兵助様

清介

素太郎郎

乙次郎

拜報

忝閱殘暑之砌 各位倍御清適之旨奉抔喜候然は小生共義寡君用向被申付當驛迄罷越候處其儘同所に相扣居候様にとの御義に付滞宿罷在申候處遠方御苦勞被成下奉拜謝候仍るは今夕御來訪も可被下處宿手狹に付御別席へ御受引可被下旨承知仕何時にも罷出拜語可仕と奉存候此段御報迄草々如此御座候頓首

七月廿日

二二六 今田彦馬・大草終吉書翰榊取宛 慶應二年七月廿日

貴酬辱拜誦仕候然る今午後御避暑旁御別席におゐて御閑話被成度藝人の御約束相成居候由就るは私共も御席末罷出候るは如何哉との御厚意難有奉存候折角之御思召ゆへ御障なから御陪從可申上候御時刻之處乍憚一寸被仰聞被下度 尊館罷出御供申上候原不明に御不都合無御座候哉何も御差圖可被下候以上

即刻

終吉
彦馬

小田村先生

侍史下

追啓

先生御來談之積にる眞の危肴宿主人の申付置候處御席に齋候る御不都

合無御座候哉是亦 御聞に入置度如是御座候

一御別席云々山本氏之事にる御座候哉

右申上通にる夫々御不都合無御座候は、貴酬を煩候に及ひ不申候

二二七 西本清介・植田乙次郎書翰廣深眞臣榊取素彦宛 慶應二年七月廿一日

忝拜誦仕昨宵は緩々得拜語且種々御馳走に罷成忝多謝仕候相願置候別帙御持せ被下忝落手仕暫時拜借奉希候拜眉御禮可申上御答迄勿々不乙

七月廿一日

清助
乙次郎

兵助様
素太郎様

二二八 今田彦馬・大草終吉書翰〔榊取〕 慶應二年七月廿二日

先刻は御邪魔申上其節拜借仕候一卷猶黃紙壹枚膽寫相濟候間完璧仕候御落手可被下候且又今午後御閑靜に候は、敝寓 御來駕被下間敷候哉申上試候先は御禮且得尊慮度如此御座候勿々頓首

七月廿二日

今田彦馬
大草終吉

小田村素太郎様

二二九 二見一鷗齋書翰〔榊取素彦宛〕 慶應二年七月廿二日

華書辱奉拜誦候殘暑之砌益御清勝奉大賀候然は藝使爲應接高森御出張被成候由御苦勞奉存候被仰越候一昨秋會津へ差贈候戰書昨秋備前行之節入貴覽候は歎願書に、戦争與贈之書には無之右戦争書其節天龍手にては出

し不申天王山手に、久阪眞木兩先生作文之由に、其節の使者大樂源太長谷川鏡之進相勸淀へ與へ候其趣意も一同存し不申定、源太は寫し可申且旨趣覺罷在候儀と奉存候同人は此節大田へ歸り居り候由に候間被仰遣度右御答迄勿々頓首

七月廿二日

一鷗齋
拜上

素太郎様

○廣澤先生へ宜敷被仰上可被下候

○藝之事件川瀬を追々可申上候初發小生於大野村藝使湯川靜次郎へ應接いたし十五日之事也

○十六日獨騎直に友田へ突入寺西盛登へ驅合其後二川主稅林孫太夫阪平左衛門等へ應接十六夜十七日迄に爲引取十七日には跡爲見分山代口迄罷

こし渠四手共陣拂仕候

津田千人計 友田 同河津 同峠 同凡 四千人計跡へ 鷹懲隊峠へ 備へ 久島へ 鴻城軍
備へ 居り候一昨日友田川瀬 小生爲地理案内 三人巡見歸り 宮内大野へ 廻
り 昨夕 歸陣仕候 藝國を 我を 詐謀と 申立殊の外 腹立なれとも 元來 東兵へ 地
を 借し 候事 曲陽に 我を 周旋と 唱陰に 東へも 志を通し 候且 今夏 小生 備へ
罷こし 候節 植田を 板倉 閣老へ 獻つら 詔を 候事 可甚 惡借地 且 敵を 廣島へ かくま
ひ 置候 儀 藝之 罪所 不逃也 此 意味を 以此 比中 驅引仕候 御賢察 可被下候

(封表)

高森 御出張

小瀬川

二見一鷗齋

小田村素太郎様

急き

二三〇 大草終吉書翰榊取素彦宛 慶應二年七月廿三日

昨日は 緩々 御高話 拜聽 辱奉存候 前夜も 深更に 及さそ 御疲可被成 奉存候 然
る 小生 只今 高森 引取申候 御禮 旁一寸 尊館 罷出候 處 祖生村に 先刻を 御出被
成候 由 宿主 申分に 御座候 間 宿主迄 御禮申上置候 然る 昨日 御密話之 趣如何
可有 御座候 哉 御模様 御分候は、内々 御知らせ 可被下奉希候 猶又 筆紙に 難
盡 御旨 趣 御座候は、何卒 此者へ 御直含 可被下奉希候 此者 儀は 玖珂縣 令手
附に 御座候

世子公之 御一件 内々 耳に入置候 譯に 御座候 間 左様 御承知 可被下候 先は 御
聞合として 如此 御座候 餘在 拜鳳 勿々 頓首

七月廿三日 朝五半時

終 吉

於玖珂驛認

榊取家文書第一 (慶應二年七月)